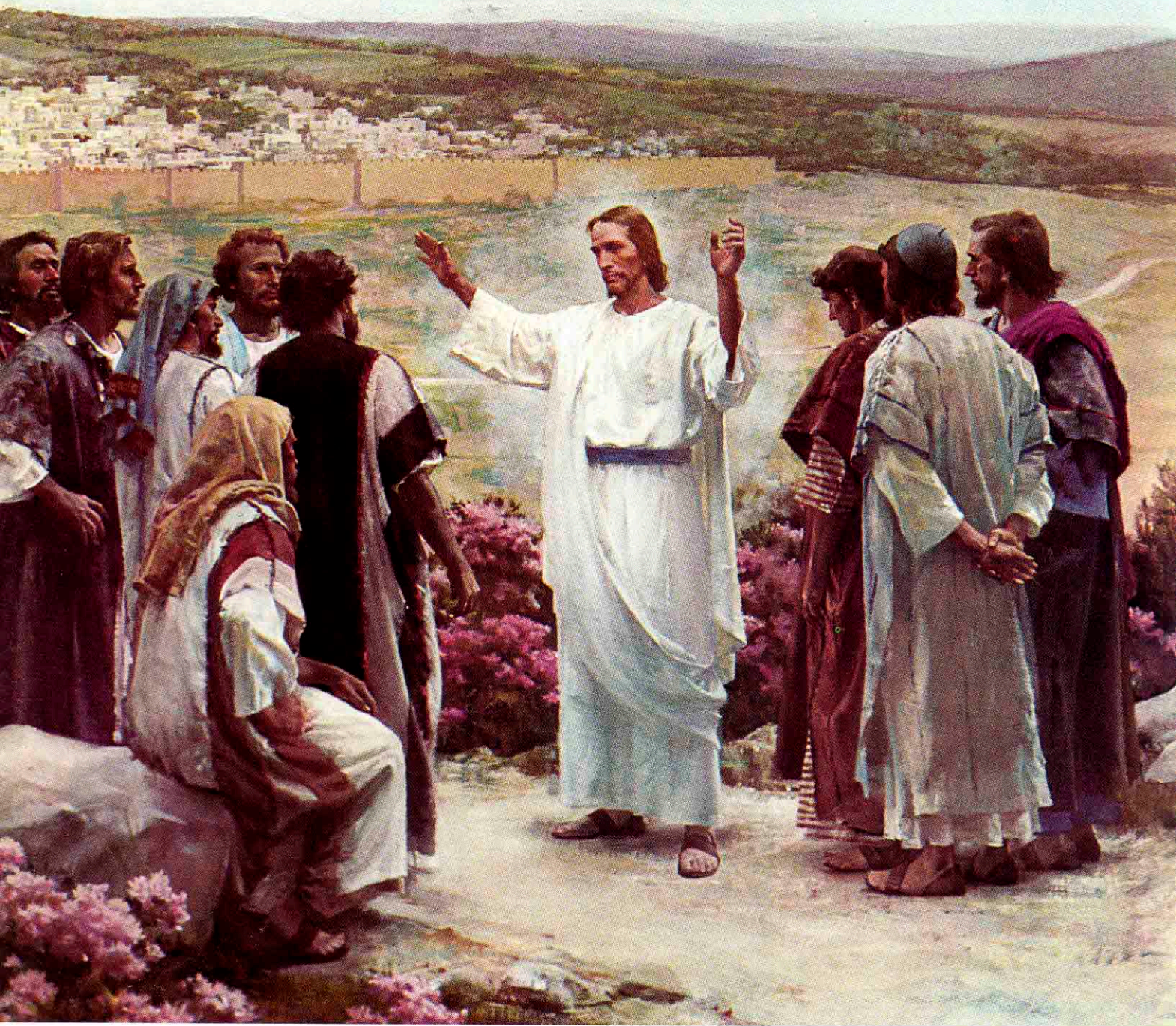




聖徒の道

10

1974

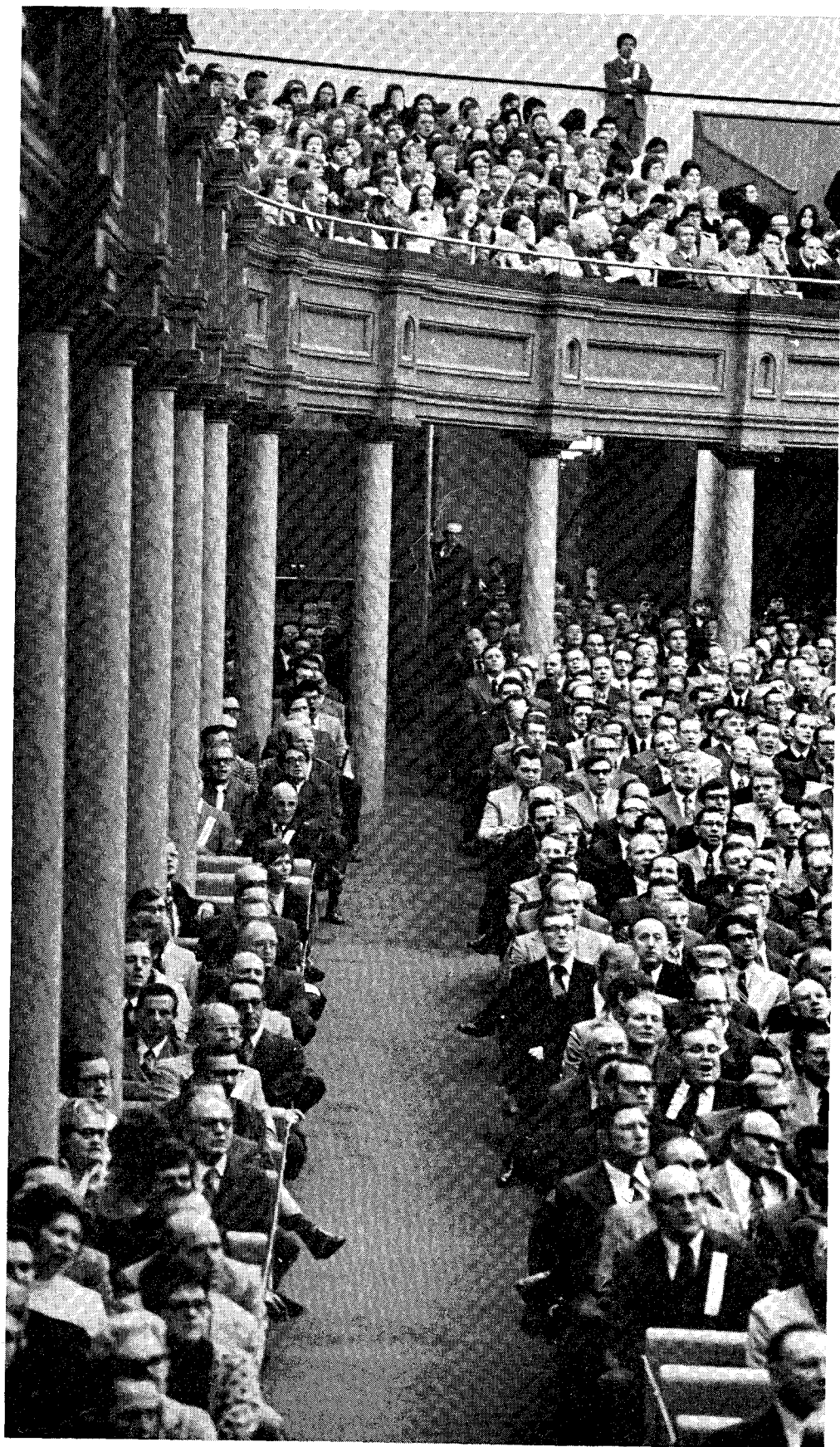
心の糧

「闇より出でて」

我々は主の業に携わっている。これは主の教会である。主が救いの計画を立てられた。そしてそれはこの時代に天が開かれて我々が受けた主の福音である。それゆえ、人生における我々の望みと目的は、主が明らかにされた真理を信じ、真理に従って生きることではない。教会の内外を問わず、いかなる人も神のみことろと一致しない教えを信じたり、慣習を提唱したり、主張を支持すべきではない。我々を救いに導く真理について目的とするところはただひとつ、すなわち主が明らかにされたことを見出し、それを信じ、行なうことでなければならない。

第十代大管長

ジョセフ・フィールディング・
スミス



聖徒の道

1974 10月号

も く じ

心の糧「闇より出でて」	ジョセフ・フィールディング・スミス
大管長会メッセージ／信頼	434 N・エルドン・タナー
神権活動：いかに成功に導くか	436 デビッド・H・トーマス
もし耐え続けるなら	439 キャロル・ラーセン
＜独身女性へのチャレンジ＞	
「逸話集、近代の使徒の生涯より」	444 レオン・R・ハートショーン
— リード・スムート長老 —	
旧約聖書に学ぶ女性像	447 アータ・M・ヘイル
カナンの征服	450 エドワード・J・ブランド
イラムのタレント	453 ロザリエ・W・ドス
身をひるがえして	456 ルース・スワンソン
小さなお友だちへ	458 S・デルワース・ヤング
おもちゃばこ	460
質疑応答	461
「われら何をか聞く」	463 スペンサー・W・キンボール
伝道一偉大な務め	466 エズラ・タフト・ベンソン
あなたの信仰の盾を強くしなさい	470 L・トム・ペリー
神に仕える決意	472 J・トーマス・ファイアンズ
イエスが歩まれた道	474 トーマス・S・モンソン
ローカル・ニュース	478

大管長会

スペンサー・W・キンボール
N・エルドン・タナー
マリオン・G・ロムニー

十二使徒評議員会

エズラ・タフト・ベンソン
マーク・E・ピーターセン
デルバート・L・ステイプレー
リグランド・リチャーズ
ヒュー・B・ブラウン
ハワード・W・ハンター
ゴードン・B・ヒンクレー
トーマス・S・モンソン
ボイド・K・パッカー
マービン・J・アシュトン
ブルース・R・マッコンキー
L・トム・ペリー

諮問委員会

J・トーマス・ファイアンズ
ジョン・E・カー
ドイル・L・グリーン
ディーン・L・ラーセン
ダニエル・H・ラドロウ
ヴェール・F・スコット

統一機関誌国際編集局

ラリー・ヒラー（編集主幹）
キャロル・ラーセン（編集副主幹）

聖徒の道

日本語コーディネーター
八木沼 修 一

ローカル編集

高 木 まり糸

聖徒の道 10月号

発行所 末日聖徒イエス・キリスト教会
東京都港区南麻布5-8-10
配 送 東京ディストリビューション・センター
東京都港区南麻布5-10-25
定 価 年間予約 1,300円 1部 130円
海外予約 1,800円

信 頼

第一副管長 N・エルドン・タナー

私が生涯を通じて最も身につまされ、しかも何よりの教訓となったのは、「息子よ、私はお前を信頼できると思っていた」という父の言葉であった。それは父が監督をしていたことで、父は、ワード部で葬儀の準備をしている間にしておくようにと弟と私にある仕事を言いつけて、出かけて行った。私と弟は父はまだ帰って来ないだろうと思い、子牛に乗って遊んでいた。ところが父はすぐ帰ってきて、私たちは仕事をしないでいるところを、見つけられてしまったのである。

私には父が私を愛してくれていることがわかっていたし、私も父を愛していたので、いつも父に喜ばれるようになりたいと思っていた。それで、父から「私はお前を信頼できると思っていた」と言われたときは、もう身を切られんばかりの思いであった。そして即刻その場で、二度と父にそのようなことは言わせまいと決心したのだった。

この出来事は父を失望させたし、私自身もなさけなく思った。そこで考えた末、「私はお前を信頼できると思っていたのだが」と、だれからも決して言われないような生活をしようと決心したのだった。そして、もしそのことで父の期待を裏切ったのであれば、天父もまた必ずや、私がバプテスマを受け、神権に聖任され、教会の責任を受けたときに、天父と交わした約束事を実行するよう望んでおられるに違いなし、ということがわかってきた。

そしてそのとき私は、天父からはなおさら「私はお前を信頼できると思っていた」という言葉と言われることのないような生活をしようと決意したのである。それ以後、私はそのように生きるべく努力した。無論、悔い改めなければならないことはあったが、いつも主から信頼されるように生活しようと決心してきたつもりである。

私は16年間教職にあったが、その間絶えず心を砕いてきたことは、天父や友人と交わした誓約や約束を守ることにおいて常に信頼できるような生活を送ることがいかに大切かを、生徒に理解させることであった。これは、私自身の子供たちにも強調してきたことである。

教会員である私たちには、真実かつ永遠の福音があり、神の神権を有し、神のみ名において行動する機会が若者にも付与されている。私たちは神の霊の子供であり、それは何にも増して大切なことである。私たちが日々、バプテスマの水に沈められたとき交わした誓約に、また神権を受け神権の職に聖任されたとき、あるいは教会その他の組織の役職に召されたとき交わした誓約にふさわしい生活を送ることが重要である意味はそこにあるのである。

最近、私はある人からこのように尋ねられた。「社会的に高い地位にある人々に対して信頼を寄せることができないのに、若人、ひいては一般市民の行動に、節操や正直、高潔などというものを期待できるだろうか」と。私の答えは、そのときも今も変わりはない。すなわち、とりわけそのように感じたことのある人は、非難を受けないような生活をするということがいかに大切であるか、身をもって知ることであろう。そのように生活してこそ私たちは信頼を受け、私たちが代表している人々から託された責務を遂行できるというものである。次のように自らに問うてみていただきたい。小さなうちに私はどんな反応を示すだろうか。

名誉と高潔ということについてどう思うか。

商売上の利益のために、事実と異なった宣伝をすることをどこまで許すか。

「恋愛と戦争、政治と競技は手段を選ばず」という昔のことわざを受け入れるか。

私たちは実際にこれらの問いを自らに投げかけ、正直に答えることが必要である。本当に私はこれらの質問についてどのように感じているのだろうか、と。

私が政界や実業界に席を置いていたとき、職を求めてくる個人個人についての人物照会の依頼を受けることがよくあった。中でも一番よく尋ねられたのは、「あなたは、彼が正直で信頼できる人物だと思いますか」ということであった。信頼できる人物として推薦できなかったときは決まって悲しい思いをしたし、反対に、即座に推薦できたときほどうれしいことはなかった。

私の友人に、ある大会社の重役でしかも政府の役人をしていいる人物がいるが、こう話してくれたことがある。「政府であるとき、あるひとつのポストに対して求人を行なったのですが、たくさんの応募があり、私たちはまず10人にしぼりました。そしてその10人について選考しているうち、その中のひとりがあなたの教会の会員であることがわかりました。それで私たちは、あなたの教会の会員ならすぐに彼を採用したのです。」

私はその友人に聞いた。「なぜ彼を採用したのですか？」

すると彼は答えて、「それというのは、彼は酒を飲んで騒ぐことがないからです。私たちは彼を信頼できるし、彼は任せられた仕事を責任をもって成し遂げる人物だとわかったからです」と言った。もしも教会の若人たちが、この信頼ということの重要性を悟るならば、それだけでもすばらしいことではないだろうか！

すでに述べたように、人に信頼されるということほど大切

なことではない。私がいつもひどく悩まされてきたことのひとつは、統計上から見ても明らかなことであるが、十分信頼に足ると思われた従業員がしばしば背任行為を行なうということである。確かに彼らの仕事の実績はすばらしいものであった。だが正直ということについてどう感じているかは、だれも知らなかったのである。

私たちは毎日、己れに問うてみなければならない。私は信頼できる人物か、だれにでも信頼される人物になろうと固く決意しているだろうか。あらゆる機会に恵まれ、前途有望な人生と世に貢献できる可能性を秘めていたにもかかわらずそれなりの決心をせず、また誘惑に打ち勝つことにより人から非難を受けないようにしようという確固たる意志がなかったために失敗してしまった人々が私たちのまわりにいる。

私たちはしばし自らに尋ねてみようではないか。私は、サタンとその軍勢が、古くから尊重されてきた道徳の水準から私たちを引き離し、新しい道徳と呼ばれているもの（実際、それは不道徳以外の何物でもないのであるが）に引き落とそうと、全勢力を注ぎ込んでいる今日の世相を見てどのように思うか。

たとえば、交際中、私は両親の信頼を得ることができるだろうか、また私たちは相互に信頼し合って身を潔く、純潔を守り、お互いを尊敬し合うことができるだろうか。また、私たちが将来どのような親になるかはこの段階で決まるということを常に念頭に置いて、真の男性らしさ女性らしさを培う事柄を実行できるだろうか、と。それらは私たちが子供たちに与えることのできる最も価値あるものである。

自分自身に尋ねていただきたい。私は、自分の子供が「私はよい両親のもとに生まれました」と真実言えるような生活をしているだろうか。また私は、私が主の聖なる宮居に入るにふさわしい者となって、今も永世にも結び固められ、そして主のみたまが宿り、神が霊の子らを喜んで送ることのできる家庭を備えるために、主から信頼される生活をするよう決心しているだろうか。主は、霊の子供たちを再び、主のみ前に帰れるよう助け導く私たちに信頼を寄せて下さるだろうか。

主は私たちに、汝の隣り人を愛せよと言われた。しかし私は自信をもって次のように言えるだろうか。私は接する人々から正直な人間であると信頼され、また人に信頼して欲しいと望むように、私自身も人を信頼することができると。また私は、什分の一や捧げ物を納めるとき主に対して完全に正直だろうか。さらに質問を続けてみよう。所得税をごまかすことは、主に什分の一を納めないこと以上に悪いことか。また国法を破ることは神の律法を破ることよりも悪いことか、と。

私たちは、「法律を守り、敬い、支うべき」を信じているが、単に罪に束縛されないがために国法を守っている人々が数多くいる。彼らは違反すれば罰せられることを心得ている

からである。神の罰は、戒めに不従順な者には必ずや下る。しかし私たちは、主が私たちに注がれた愛と犠牲の故に、また主が約束された祝福の故に、主の律法と戒めを守らなければならないのである。出エジプト記20章を繰り返し読んで、これらの戒めを日々の生活に取り入れようではないか。

私たちは、大方信頼できるというのでなく、どんなときでも信頼されるようであればならない。大事に忠実であるように、小事にも忠実であるようにしよう。仮にそれが2分半の話であれ、ホーム・ティーチング、病人を見舞うこと、あるいはステーク部宣教師やフルタイム宣教師としての召しであっても、信頼を受けてすべての務めを果たすことができるだろう。

次の聖句に心を留めていただきたい。「見よ、召さるる者は多けれども選ばれる者は少し。選ばれることなきは、これそもそも何の故ぞ。

そは、人々の心甚しくこの世に属けるものの上にあり、唯々人間の誉を得ることをのみ望み、……」（教義と聖約121：34、35）すなわち彼らは信頼できないのである。

主がここで、「選ばれる者」と言っておられるのは、完全に信頼できる人のことである。私たち自身、これらの中のひとりになるよう決心しようではないか。時々、自分自身にこう問いかけてみるとよい。私はキリストの福音を恥としていないだろうか、あるいは、私はイエス・キリスト教会の会員であることや、世と異なった存在であることに對して弁解していないだろうか。主は、私たちは特殊な民となるであろうと言われた。それは、もし福音の教えに従って生きるなら、私たちは世と違った者になるということである。たとえ自分ひとり福音の道を歩むことになったとしても、嘲笑や非難に耐えて、自分が正しいと信ずる道を固く守り通すことができるだろうか。また私は、主の教会と予言者を弁護し、私のために払って下さった主の大いなる犠牲を悟って、その犠牲にふさわしい者となるということについて、主は私に全幅の信頼を寄せて下さるだろうか。

雄々しく立ち、主に信頼を寄せていただきたい。かつてヨシュアが言ったように、私たちもこう言おうではないか。

「……わたしとわたしの家とは共に主に仕えます。」 主の側にありなさい。この歌を心に留めていただきたい。

敵はわれらより多く

まさるとも退くまじ

真理の見えぬ力

われらを助く

敵おそれず進まん

主はわが味方なり

悪の言葉を聞かず

主に従いてゆかん

末日聖徒讃美歌110番

以上の事柄を行なうために、私たちは希望と決断力を持ち、あらゆる事柄において自らを鍛練する必要がある。そうするならば、各自が「あなたは信頼できる人です」と言われるようになるであろう。

これまで非常に長い期間、ワード部の監督会は、神権会の間中たった3人だけで壇上に座り、集会を管理してきました。その他の神権者はオルガニストと指揮者を除き、すべて一般会衆席に着いてきました。しかし、今日このような状況は多くのワード部では見られなくなっています。というのは、監督会と共に長老定員会会長会と七十人および大祭司グループリーダーも壇上に座るようになったからです。

神権役員を一般の神権者と区別して壇上に座らせるということは、メルケゼデク神権定員会に対する新しい姿勢を示すものです。

「定員会に内在してきた神権の偉大な力が、今やせきを切って流れ出ている。」メルケゼデク神権定員会カリキュラムの担当者であるジョン・M・R・コーベイ兄弟はこう述べています。彼はさらにこのようにつけ加えています。「今や定員会会員の系図、伝道、ホーム・ティーチング、および個人の福祉に対する定員会の責任は、かつてないほどに増大している。そして監督は、青少年の仕事やワード部の会員へのカウンセリングのために多くの時間をさくようになった。」

新たに強調されている点としてあげられるのは、神権者を活動に参画させるということですが、この影響は定員会指導者の訓練プログラムや長老見込み会員プログラムへの新たな関心となって現われてきました。

この新しい姿勢の典型的なものとしてあげられるのが、ミシガン州ブルームフィールドヒルステーク部の定員会指導者訓練プログラムです。「私たちは長老定員会会長を召すとき、監督会を召す場合と同じような気持で召さなければならぬという結論に達しました。」ジョン・R・ファイファーステーク部長はそう言っています。

ブルームフィールドヒルステーク部

神権活動

いかに

成功に導くか

デビッド・H・トーマス

では、長老定員会の会長会に召される神権者はすべて妻と共にステーク部長会の面接を受けます。この席にはステーク部長会が全員出席し、責任や管理の職について詳しく説明します。

「神殿に入る資格のない神権者が召されることはありません。なぜならこの責任を果たすには最もすばらしい神権者が必要だからです。そしてステーク部は、召されたふさわしい神権者には適切な指導と援助を与えなくてはなりません」とファイファーステーク部長は言っています。

この援助を与えるという目的から、ファイファーステーク部長は高等評議員にひとつの割当てをしました。それは、各高等評議員がひとつのワードもしくはひとつの長老定員会について責任を持つということです。（両方を担当することはない。）ファイファーステーク部長によれば、この方法を採用すると、高等評議員が担当の会長会と共に過ごす時間が最も長くなるということです。

長老定員会の会長会にアドバイザーとして専門にひとりの高等評議員を割り当てるほかに、ステーク部長自ら毎月定員会会長と面接をします。これは毎月のワード部監督との面接と同じです。定員会会長はこのステーク部長との面接で毎月のホーム・ティーチング評価をします。

ファイファーステーク部長の言葉をさらに引用してみましょう。「私たち

の長老定員会に関するプログラムにはいくつかの目的がありました。まず定員会指導者ならびに定員会会員双方に、彼らに与えられている仕事がとても大切なものであることを理解してもらいたいと思ったことです。神権定員会は教会組織の基礎となるユニットであり、彼らに適切な認識を与えることによって、私たち教会員は神権の目的と重要性をより一層理解するようになるのです。」

長老定員会とその責任について集中的に努力を傾けていった結果生じた成果には目を見張らせるものがあります。デトロイトステーク部では15カ月間に66人の新しい長老を聖任し、44人の長老見込み会員を再活発化させ、そのためにふたつの新しい長老定員会が必要になりました。

成果の中で非常に重要なものとしてあげられるのは、26人の不活発になってしまった長老が活発になったということでしょう。

「私たちが行なったのは、まず定員会の会員に神権の責任が大切なものであることを自覚させたこと、次に定員会指導者に、この管理の職がいかに重要なものであるかを理解させたことです。」ファイファーステーク部長はこう言っています。

アラスカのアンカレッジステーク部が開いている長老見込み会員のためのクラスでは、33人がメルケゼデク神権の長老の職に召され、メルケゼデク神権の活動に参加するようになりました。サモアでは全伝道部の長老見込み会員の中で、22パーセントの人が1年でメルケゼデク神権を受けました。

ユタ・バウンテフル・ハイツステーク部では、1972年に特別訓練プログラムに参加していた163人の長老見込み会員の内、40人が大神権を受けられるようになりました。

同じようなパーセンテージがイギリ

ス・サザンプトンステーク部でも見られます。ここでは28パーセントの兄弟が大神権を受けられるようになり、またメリーランド・シルバースプリングステーク部では、1972年に19パーセントの兄弟がメルケゼデク神権を受けられるまでになったのです。

世界中のステーク部が、メルケゼデク神権定員会を活発にするという同じ目標に向かって努力を傾けてきました。そして各ステーク部は指導者の靈感を通して神権の誓約を新たにし、力を増してきたのです。

シルバン・ウィットワーステーク部長の管理するミシガン・ランシングステーク部では、七十人最高評議員会会員のローレン・C・ダン長老から1971年の暮れにひとつのチャレンジを受けました。それは、神権者が家長となっている50家族を活発化させることでした。

そこでウィットワーステーク部長は、彼の管理下にある11名の監督、支部長に、定員会活動を通して活発化させようと思う家族の名前を提出するように要請しました。そして、その経過を毎月の個人面接のときに報告してもらうようにしたのです。この目標の設定とその後のあと押しが効を奏しました。あるワード部では、大祭司のグループリーダーと日曜学校の会長、そしてワード部幹部書記がこのプログラムによって活発になった50人の中から召されました。また、現在副支部長や支部幹部書記として働いている人もいます。

4つの家族は初めて神殿に入りましたし、ひとりの新しく召された長老は伝道に出ました。このプログラムを通じて活発になった長老と七十人、大祭司は20名を越え、また25人の兄弟が新たにメルケゼデク神権の職に聖任されました。ウィットワーステーク部長は、これらはすべてこのプログラムの成果であると語っています。

ワード部の指導者および神権指導者はウィットワーステーク部長に毎月報告をしながら、わずか半年で目標の半分以上を達成しました。そして50家族という目標は、目標設定後わずか1年で達成されたのです。

ウィットワーステーク部長は次のように言っています。「目標を達成するのに必要だったことは、新たにきちんと時間を取って、人々を教会の活動に活発に参加させるという各ワード部・定員会の目標を毎月チェックし、あと押しすることでした。」

教会の最もよく知られたメルケゼデク神権プログラムに神殿訪問があります。この成功例を私たちはユタ・グランツビルステーク部に見ることができます。

「私たちの神殿訪問計画の成功は実にふたつの要素がうまくからみあったからと言えます。それは、神殿訪問セミナーの準備の段階でよく断食と祈りをしたこと、そして有能で熱心な神権ホーム・ティーチャーがいたことです。」ケネス・C・ジョンソンステーク部長はこう述べています。

150家族が神殿に行くという目標を設定したので、ジョンソンステーク部長はまず評価を計画することから始めました。ステーク部長は、各神殿訪問セミナーのためにことこまかなアジェンダを用意し、またそれぞれのセミナーが、人々に靈感を与え、やる気を起こさせるようなものになるように策をめぐらしたのです。

神殿訪問に参加する家族がセミナー以外の時間でもいろいろな問題について援助が得られるように、ステーク部長はその家族のために有能なホーム・ティーチャーを召すよう神権指導者に要請しました。

その場合シニア・ホーム・ティーチャー夫妻は特別な責任を受けました。つまりフェローシップの役割を引き受

けるよう要請を受けたのです。具体的には日常生活においても面倒を見、また一緒に神殿に行く計画を立てるということです。

「これが神殿訪問計画を成功に導くひとつの鍵と言えるでしょう。神殿を訪問することができた家族の話から、心から心配をしてくれる教会員の家族がどれほど重要であるかがわかります。

こうしてこの家族は、単に『割り当てられた』友人としてではなく、真の、そして永遠の友であり兄弟であり姉妹となったのです。」

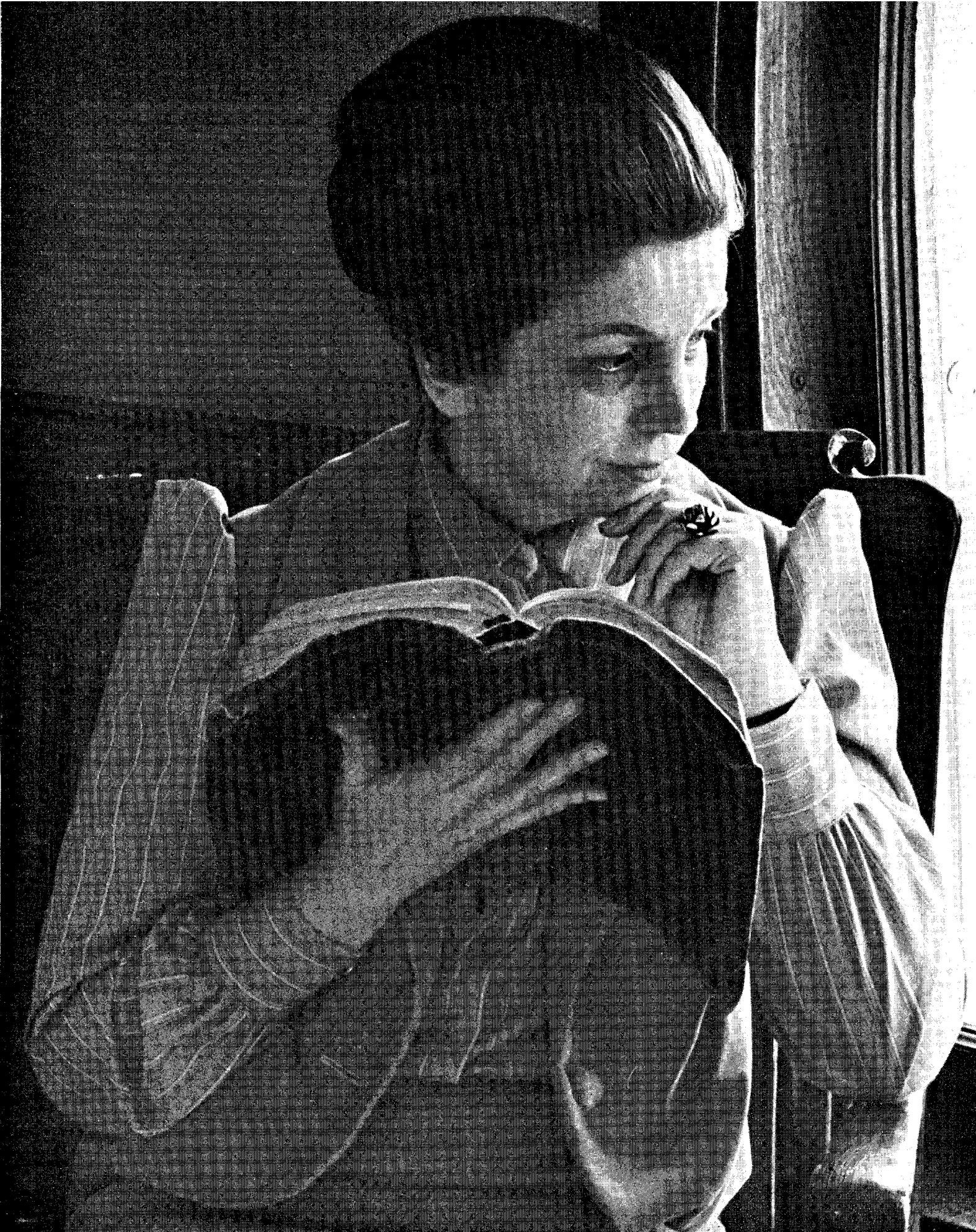
グランツビルステーク部の神殿訪問計画は大成功でした。30家族が初めてソルトレーク神殿へ行き、73人の子供が両親に結び固められたのです。そしてまだほかに新しく長老に召された20人の兄弟が、すぐにでも神殿に行きたいと望んでいるのです。

「これらの経験を通して兄弟たちは、本当に重要な神権の原則を学びました。その原則とは兄弟愛です。」コーベイ兄弟はこう語っています。

「長い間教会では神権定員会を、日曜日の朝の会で、他の補助組織のクラスと同じようなものだと考えていました。でも、主が神権定員会について考えておられたことは、そうではありません。」

メルケゼデク神権定員会は、会員の霊的福祉に対してワード部の監督に匹敵するほどの責任を持っています。長老および長老見込み会員、そしてその家族を合わせると、全教会員の83パーセントを占めていることになります。この事実をよく考えたとき、これがいかに重要な責任であるかがわかるでしょう。

「主は神権指導者を、責任を少しずつ増し加えながら一步一步確実に備えてこられたように思える。」コーベイ兄弟はこう結びました。



もし耐え続けるなら……

独身女性へのチャレンジ

編集副主幹

キャロル・ラーセン

婚約者を戦争で失ったある年若い姉妹が、慰めを見いだそうと、祈るような気持でtemplスクエアの訪問者センターへやってきました。彼女たちの交際は美しいものでした。婚約者を失った姉妹は、この先どうして生きていくのでしょうか。瞑想のための部屋で、彼女の心は展示物に書かれたひとつの聖句に引きつけられました。「もし汝わが誠命を守り終りまで忍ぶならば永遠の生命を得ん。これ神のあらゆる賜の中最大なるものなり。」(教義と聖約14:7)

ひとりきりの人は、どうしたら終りまで立派に耐え続けることができるのでしょうか。

教会には65万人以上の成人の独身者がおり、半数以上は女性です。教会の独身女性とはどんな人たちなのでしょう。そう彼女たちは年齢も関心も個性も全く異なった人々です。未婚者もいれば未亡人もいます。例をあげてみましょう。

イレタ、70歳。独身を通したが、多忙で充実した人生を送ってきた。元教師。

ルシル、50歳。長年年老いた母の面倒を見てきた。最近その母親が亡くなり、これからは自分で新しい人生を切り

り開いていかなければならない。

グレース、35歳。自動車事故で夫とふたりの子を失った。

マリー、40歳。教会に入ろうとした矢先、夫に先立たれた。

このほか大勢の教会員が似たような境遇にあります。彼女たちの大半は、もし機会が許せばあるいは状況さえ整えば、結婚したいと考えているのです。

サラは8歳のときにバプテスマを受けました。曾祖父母は教会初期の改宗者で、両親は愛と献身の模範を身をもって示してきました。彼女自身、才能を発揮できる恵まれた仕事を持ち、住まいは快適で、扶助協会の責任ある役職を受けていました。一見して、彼女はすべてに恵まれているようでした。

しかしサラは、身のふしあわせを感じていました。最高の昇栄を受けるには結婚しなくてはならないということを知っていたからです。過去に数回結婚のチャンスはあったのですが、祈ってみるたびに、相手は自分の伴侶となるべき人でないという答えを受けたのでした。親戚や友人の多くが善意で、「どうして結婚しないの」、「あなたみたいなチャーミングな人がなんで独身でいるんでしょう」、「チャンスがあっ

たときにどうして結婚しなかったの。すぐに婚期は終わっちゃうわよ」と彼女に言いました。結婚の原則があまりに強調されるので、サラを初め末日聖徒の独身女性の中には、結婚だけで人の価値が決まるような気持ちに追いつめられた人もいます。その結果過敏なほどに意識して、自分は大切な永遠の目標を達成していないという思いに絶えず駆られるのです。年がいっても独身でいる男女にとって最も大きな圧力となるもの、最も耐えがたいことは、自分の状態をいやというほど知り尽くして、できるものなら早く結婚したいと願っているのに、友人や親戚が、善意でありながらきわめておしつけない忠告をすることでしょう。

サラはチャーミングな女性です。しかし30代に入っても結婚できないので自分は魅力がなく人から好かれなれないと思い込んでいます。時々自分にいや気がさし、生活に張りやなくすることがありました。彼女には、それに負けてしまっただけで、祈りに応え、彼女の人生を導いてくれる神の力を否むことになるということがわかりません。天父は自分を助けてくれない、いや、助けてくれることなどあろうはずがないのだと考えるとき、すでに信仰は疑惑に変わ

っているのです。このふたつは共存できないのですから。時たま疑いが起きるのは普通としても、失意が続いては信仰は弱まってしまいます。そのような気持ちに打ち勝つ道は、神は正しい祈りに応えられないはずがないという、揺るぎない信仰を育てることです。神はその人にとって最もふさわしいときに応えて下さいます。必ず応えて下さるのです。そのような信仰を得るのは簡単なことではありませんが、手に技術をつけると同時に、絶えず勉強と訓練を重ねることによって養われるのです。結婚するにふさわしい人の、みこころに適った正しい願いは、主のよかれというときに、もしこの世でなければ必ず次の世で応えられるのです。

サラの友だちは鈍感な人ばかりではありません。ある日、サラが元気がないことを見て取った友だちはこう言いました。「むずかしいからって、あきらめることはないわ。」友人のこの短い励ましの言葉は、彼女に欠けていたものを思い出させました。彼女は今、しきたりにははずれているのではという、よく聞く忠告や圧迫を受け流して、楽しく積極的な生活をしようと努力しています。それによって、独身の日々を教会や社会や隣人への貢献に変えることができるのです。神を固く信じてより頼み、結婚は永遠の生命への無限の道程の一地点というより、到達できる大事な一里塚であると考えることによって、サラにはそれができたのです。「天が下のすべての事には季節があり、すべてのわざには時がある。」(伝道3:1)サラは、この5年、10年、20年、いやひょっとしてこの世では永遠の伴侶を見つけられないかもしれませんが、いつ結婚することになってもよい

ように準備していなくてはならないと思うようになりました。たとえこの世では結婚しない姉妹たちの中に数えられるとしても、サラは、ふさわしい者には必ずすべての祝福が与えられる、と主が予言者を通して約束しておられることを知って平安な気持ちでいることができるのです。

ジョセフ・フィールディング・スミス大管長はこう語っています。「もしも若い女性が胸にしっかりと主のみ言葉を受け入れ、正しい状態で律法を守っていながら、愛していない者と永遠に結ばれる結婚の誓約を交わすことがどうしても正しくないと考えて、その申し込みを断わっても、彼女は自分の報いを失わないであろう。主は彼女の心の望みによって彼女を裁かれる。たとえ来世まで延ばされるとしても、やがて止められていた祝福の与えられるときが来る。」(ジョセフ・フィールディング・スミス *Doctrines of Salvation* 「救いの教義」[英文]2:77)

教会の独身女性の多くは、「女性の天職をまっとうできず、愛する夫や子供を持たないのは、自分に何か悪いことがあるのではないか」と考えます。しかし、それは違います。姉妹たち、あなたに、忍耐と熱心さと信仰で解決できないことはありません。

姉妹はいろいろな家族を持つことができます。「家族」という言葉を「夫と子供と自分」というふうに狭義に解釈しすぎるのではないのでしょうか。その狭い意味での家族がなかなか得られないため、自分の人生から家族を葬り去って、家族から得たり与えたりすることのできる満足を自ら拒んでいるのです。ではどのような家族を求めるべきでしょうか。私たちは、最低3家族に子供として属していることを見失っ

てはなりません。まず私たちは、天父の家で霊の子として生まれました。次に、地上の両親の子供でもあります。そして最後に、私たちはすべての「強くして善良な民」の血をひく娘でもあります。あなたには大勢の先祖がいることでしょう。家族の歴史をまとめ系図を探求し、家族構成を明らかにし、自分の家系に神殿の儀式を施し、先祖から自分に伝わる遺産に心を向けることができます。あなたには子供として幾つもの家族を持つ上に、兄弟姉妹たちの家族にも属しているのです。その意味で、地上の人間は皆あなたと関係があります。3番目の、「養い育てる」役割を持った家族構成の中で、彼女は自分も親になりたいと願っています。それは犠牲と奉仕と教育の機会です。独身の姉妹は扶助協会の母親教育を学び、家事の技術を身につけ、家庭に入り用な品物を集め、家の飾り方を学び、正式な場(初等協会、子供日曜学校など)や日常の場(隣り近所や友人や親戚の子供)で小さな子供たちと交わりの機会を見つけるなど、自分の時間を使って、将来自分の家庭を作るときのために準備することができます。

ハロルド・B・リー大管長は教会の独身女性に関心を寄せ、人々に奉仕するよう勧めました。

「皆さんの中には、家庭の中に伴侶となる人をお持ちでない方もおありと思う。ある方は妻を亡くされ、ある方は夫を失ってしまったかもしれない。あるいは、まだ愛を分かち合う方が見つかっていないかもしれない。あなた方は、最も気高く、信仰深く、勇敢な、主のおきてに従って生活するよう努力を惜しまない人々の中に数えられ、この地上に神の王国を建設し、人々に奉仕の手を差し伸べるために生きている

のである。

人生とはあなたにとって多くの意味を持つものである。チャレンジにあうときに強くありなさい。あなたの愛する人に尽くすときに、仕事や家庭での任務をより良く行なうときに、み業を遂行するいろいろな方法がある。教会は、まずあなたを手始めに、人が永遠の生命の喜びを見いだす機会を限りなく提供している。

絶望や自己嫌悪により、あなたが正しいと知る道から退いてはならない。あなたの思いを、人の助けに向けなさい。あなたにとっての主のみ言葉は、特別の意味を持つものである。『自分の命を得ている者はそれを失い、わたしのために自分の命を失っている者はそれを得るであろう。』(マタイ10:39)

また、ベンジャミン王もこう語っている。『ごらん、私がこれらのことを言うのはお前たちに知識を与えるためであって、またお前たちが同胞のために務めるのは、ただお前たちの神のために務めるのであることを悟らせるためである。』(モーサヤ2:17)

神は、末日聖徒の家庭を祝福したまい、この世における幸福と、来たるべき世における日の栄の王国への昇栄の基をこの家庭におかれるのである。」

(ハロルド・B・リー「堅固な家庭」P.8)

福音の諸原則を正しく理解するすべての教会員は、やがては最高の昇栄を受けたいと思っています。しかし、この世で力の限りを尽くして自分の才能を伸ばさなければ日の栄えの王国において完全を受けることはできないのです。創造の以前、天上の会議で、地球に関して明瞭で詳細な計画が立てられました。前世のその例が示す通り、私たちは事を始める前に、一体どうなり

たいのか明瞭な計画を立てなくてはなりません。(1) 目標を持ち、方向がつかめると、どういう方向はいけなかがははっきりする。(2) 心に目標があれば、「今、自分はどの状態にあるのだろう」、「今の状態から理想の状態へ行くにはどうしたらよいだろう」という大事な疑問の答えがわかる。(3) 目標があると、いつそれが達成できたかわかる。(4) 目標がはっきりわかっていれば、目的を持って行動できる。(5) 目標に集中することにより、力を浪費せずに物事に打ち込むことができる。(6) 明確な目標によって自信が付き、落胆することはあってもそれを克服できる。

独身の姉妹は、円熟した人間になるためにいろいろな角度から目標を立てるとよいと思います。(1) 霊的成長 (2) 社会的成長 (3) 家族としての成長 (4) 個人の成長 (5) 職業面での成長、このすべてを目標に取り入れることです。

ジョセフ・F・スミスは、若い女性が人生を送る上で実際的な準備をするように勧告しています。

「若い女性が早くから生活設計や特定の目的を立てることは非常に大切であると私も考えている。高貴で良いもの、自分自身と共に他の人の利益にもなる…目的を持つようにさせなさい。……心に高貴な思いを持ち、気高い目的を養い、目的と大望を高く持ちなさい。役に立つこと、助けること、自立することにおいてある程度独立しなさい。しかし、隣人から全く独立しているといえる人はいないし、天父に全く頼らないというような向こうみずな人もいるはずがない。最も高い意味での教育を受けなさい。時間と体と知恵の許す限りの働きをしなさい。努力を無

駄にせず、無為な結果や悪をもたらすことのない正しい道に努力を集中させなさい。

最も良き友を求めなさい。あなたが交際する人々の中であって祝福となり、あなたの生活を最も良きものとするため、あらゆる良きものを求め、人生の義務を悟るため、親切、礼儀を尽くし、快活でありなさい。……

女性は弱いものだとかく口にしたがる人々がいる。私はそれが正しいとは思わない。肉体的には弱いかも知れないが、……男性は本当の確信を持っている女性にどのように匹敵できるというのだろうか。……彼女たちは常に進んで犠牲を捧げ、動じぬこと、神に近いこと、道徳、信仰において男性に匹敵する者である……

若い姉妹の皆さん、あなたを管理する人を支持し、あらゆる機会を活用し、悪を退けるよう勤める。私の述べたことを心にとめなさい。そうすれば、あなたはすばらしい性格の持ち主となって人生における誉れを得、社会を築く有力な要因となることができるであろう。必要ならば人生のほかのものを犠牲にしても、威厳、高潔、徳を保ちなさい。この道を進みなさい。そうすればあなたは多くのことを知らないかも知れないが、最も気高い女性のひとりに加えられるであろう。男性はそのような尊敬すべき若い女性を愛さずにはいられなくなるのである。」(ジョセフ・F・スミス「福音の教義」第2巻P.91, 92)

結婚しない理由はさまざまあります。おそらく独身者の一人一人が違った理由を持っているでしょう。体や心の健康がかんばしくない、職業が制約される、ほかにしなくてはならない責任がある、機会がない、配偶者に対す

る理想が高い、失恋をした、引っ込み思案、子供を育てるのがいやだ、など。伝道部では、ふさわしい相手を見つける機会のないことがよくあります。多くの姉妹は教会外の人と結婚することに将来の危険を感じて、そのために独身を通そうとしています。

最近ビクター・L・ブラウン監督は教会でふさわしい伴侶を見つけられない人たちについて質問を受け、次のように答えました。「それは大きな問題だと思っています。多くの地方で、異性の教会員に会う機会が制限されています。（この問題は特に女性にとって深刻だと思われます。これから述べることは男性にもあてはまりますが。）

もし未婚の姉妹が能力の限りを尽くして福音に従い、主を信じるならば、望むことが実現するというのが、私の考えです。こうなってほしいと思った通りのことではないかもしれませんが、主はその人を愛されますから、ふさわしいことが起こるでしょう。主はその人の問題をよく知っておいでです。立派な若い男性は大勢います。未婚の姉妹が結婚前に、信仰をもってそのような男性に教え、その男性が彼女を愛しているためではなく、福音が真実だと知ってバプテスマを受けたなら、主は彼女を祝福されるでしょう。その姉妹は忍耐と強い信仰を持たなくてはなりません。しかし、そのような立場にあって強い信仰をもった姉妹を、私は大勢知っています。」（「ビクター・L・ブラウン監督との一問一答」）

結婚の誓約を受けるのが現世であろうと来世であろうと、それは昇栄の絶対条件です。ジョセフ・F・スミス大管長はその必要を次のように説明しています。「女性なしで日の栄の王国に

救われ、昇栄できる男性はおらず、ひとりきりで完全に到達し、神の王国に昇栄できる女性はいない。……神は初めに結婚を定められた。」（ジョセフ・F・スミス *Conference Report* 「末日聖徒イエス・キリスト教会大会報告」 1913年4月〔英文〕P.118, 119）

結婚の圧力は女性だけにかかってくるのでしょうか。決してそうではありません。私たちの社会では、男女は交際については女性よりも男性の方に積極さが求められているので、独身男性にはさらに大きな責任があります。

ジョセフ・フィールディング・スミス大管長は次のように書いています。

「この大切な結婚という戒めを不注意にもゆるがせにする若い男性、結婚生活に伴う責任を回避したいという利己心から結婚しない若い男性は、神の目に不興を買っている。昇栄は責任を意味する。責任なしの昇栄などはありません。」（*Doctrines of Salvation* 「救いの教義」〔英文〕2：74）

教会員として、神権者としての責任とは別に、多くの独身男性は違った重圧感を感じています。それは独身女性からの圧力です。

最近結婚したある男性が述懐するには、彼のワード部の独身女性は独身男性の2倍もあり、「男性の方からは思うように、交際を申し込めなかった」という。「妻の魅力は、目の色を変えて、夫を捜したりしなかった点です」と彼は言った。

ベルリンステークスのシェルクステークス部長は、妻が自分に主導権を持たせてくれたために彼女を愛するようになったと、話しています。シェルクステークス部長は医師で、終戦時にベルリン病院に勤務していました。教会員で

「独身青年医は私ひとりきりで、独身看護婦は何百人といました。彼女たちは、終戦になって男たちが帰国し、その中から自分の夫を捜せるようになる日を待ちわびていました。」

シェルク医師が妻を見つけたのはこのような状況の中ででした。

「彼女はわたしのあとを追いかけてりしない数少ない女性のひとりだったと思います。だから、彼女に注意が向いたんです。」

シェルク姉妹はこう言いました。

「女性心理を利用して、ちょっと遠慮しただけよ。それがよかったでしょう。結婚したのは1947年でした」と。

シェルク姉妹は結婚の2日前にバプテスマを受けました。「彼は真実の教会のことを私に教えてくれました。それ以前に属していた教会にいろいろ欠けた点があったことはすぐわかりました。まことの福音が理解できるようになって、結婚式の直前に夫からバプテスマを受けられたのはすばらしい経験でした。」（*Church News* 「チャーチニュース」〔英文〕1974年2月23日）

永遠の伴侶として対等なつれあいとなるには、ただ「はい」ということ以上の、実に多くのものが必要とされます。怠惰な習慣を野放しにし、他人はおかまいなく自分のことだけにかまけて無為な生活を送りながら、同時に日の栄の結婚の用意ができるとは到底考えられません。女性は円満な人格を養い、自分ならではの技術や才能を伸ばし、知識を得、きちんとした身づくろいで、尊厳を身につけること、つまり神の娘らしい外見と行動を取ることです。リー大管長は末日聖徒の女性に、真実の女性らしさを尊ぶよう勧告しました。「末日聖徒の姉妹の真の模範となるよう、あなたを造った御方のよう

に思索し、信じ、生活し、装い、自分自身を治め、神が望んでおられる女性になりなさい。

神から与えられた体を真に守り装う女性は、人を魅了し、また夫の愛を勝ち得る人は本当の女らしさ、自然さ、清さ、美しさに称賛を送るのである。姉妹の皆さん、あなた方に言うことは神が望まれる誠実な女性になりなさいということに尽きる。」(ハロルド・B・リー『女性であることを誇りにしなさい』「聖徒の道」1972年7月号 P. 289)

10人のおとめのたとえ話はここにもあてはまります。(マタイ25:1-13参照) 5人のおとめはあかりを用意して花むこの来るのを待っていました。その時が来て、彼女たちは準備していたため、花むこについて行くことができました。5人の愚かなおとめたちは後に残されました。それと同じで生活を整えた末日聖徒の独身女性は、昇栄のどの段階にも入ることができます。辛抱強く待ち続け、やがて日の栄の伴侶を選ぶ機会が訪れたときに、彼女は立派に選択できます。その用意があるのですから、彼女は正しい選択ができるでしょう。

問題はどのようにして結婚相手を見つけるかということではなく、どのようにして誤った選択を避けるかということです。ジョセフ・フィールディング・スミス大管長は、結婚相手を選ぶには慎重を期さなければならないということについて、次のように勧告しています。「永遠という長さに比較したらこの世の人生は短い。結婚の誓約が永遠に続くことを考えたとき、慎重に考慮するのは、もっともなことである。人生におけるこの最も大切な一段階を踏むにあたって性急な行動をとれ

ば、夫婦、子供のこの世での生涯は悲しみに満ちたものとなるであろう。そしてその波紋は永遠にまでも及び、果てしなく耐え続けなければならないような取り返しのつかない悲しみをもたらすことにもなるのである……。独身の姉妹たちに申し上げたい。もしも信仰に忠実で主の福音を信じる男性を見いだせないならば、独身生活を甘受した方が良い。神の王国における救いを失うよりは、この世でよく自らを修め、不死不滅の生命を受ける方が良いのである。おぼえておいていただきたい。忠実にかつ誠実に生きるならば、あなたがたが一時的に得られなかったものよりもっと多くのものを、主は喜びと永遠の結び固めという形で償って下さるのである。」(*Doctrines of Salvation*「救いの教義」[英文] 2:77, 8)

末日聖徒の女性は、既婚未婚を問わず、自らを完全にしよう努力しなければなりません。夫という協力者がいれば簡単に解決のつく問題もあれば、必ずしもそうでないものもあります。既婚者にはやはり既婚者としての問題や試練、わずらいがあります。結婚すればすぐ天国のような生活が送れるような考えを持つのは現実離れしているばかりか、そのような女性は今の自分自身を改善せずにはいたずらに将来の幸福を夢みる誘惑にかられてしまうのです。またある人はこの世では何もせず後世にあらぬ期待をかけると同様に、結婚生活に対しても知らず知らずのうちに誤った期待を抱いてしまうのです。聖典にはこうあります。「なぜならば、あなたたちがこの世を去る時あなたたちの肉体を離れる霊は、永遠の来世に於て再びあなたたちの身体に宿る力を持っているからである。」(アルマ34:34) 同様に、人が現在持って

いる特質や人格上の欠点、徳は、たとえ結婚してもそのままの状態その人に伴っていきます。結婚に対して、また結婚に伴う数々の試練に対してよく備えれば備えるほどその人は幸福になれるのです。独身時代を準備と活動の時代として賢明に過ごさなければならない理由はここにあるのです。

豊かな充実した生活をすることは、末日聖徒の独身女性に与えられたチャレンジです。ひとつひとつのチャレンジに柔軟性と創造性をもってあたれば、満足と心の平安が得られるのです。独身女性へのチャレンジとは次のことです。

1. 主に近く生活する。
2. 前向きの人生を送る。
3. まわりの圧力にめげず、結婚だけで自分の価値がきまるのではないことをはっきりと理解する。
4. 独身の間に意義ある奉仕を行う。
5. 忍耐する。(たとえこの世で結婚できなくとも、ふさわしくありさえすれば、来世で必ず結婚できる。)
6. 目標を定め、達成する。
7. 自分はなぜ未婚でいるのか理由を認識し、自分でどうにもならないことはそのまま受けとめる。
8. 家族的な活動に力を入れる。
9. 男女の永遠の役割を理解し、尊重する。
10. 永遠の伴侶となる準備をする。

末日聖徒イエス・キリスト教会の姉妹は、年齢やまわりの事情がどうであれ、自分を永遠の視点から見つめることによって、独身の日々を豊かな日々に変えていくことができるのです。昇栄という目標は努力に値するのですから。

※レオン・R・ハートション編「逸話集、近代の使徒の生涯より」(*Exceptional Stories From the Lives of Our Apostles*) ソルトレークシティー、デゼレト出版社、1973年、許可を得て転載。

リード・スムート長老

略 歴

リード・スムート長老は、1862年1月19日ソルトレークシティーに生まれ、ユタ州プロボで育った。父親アブラハム・O・スムートはソルトレークシティー助役、プロボ市長、ブリガム・ヤングアカデミーの創立者のひとりであり、母親のアニー・カスティン・モリソンは、信仰に従い、単身祖国ノルウェーを離れてユタに移住した改宗者だった。

リード・スムートはソルトレークシティーに在る間、ウィリアム・ウィルスやカール・G・メーザー博士のもとで学んだ。1872年に一家がプロボへ移転すると、デゼレト大学分校に籍を置いた。1876年4月にブリガム・ヤングアカデミーが開校すると、まっさきに登録されたのは彼である。彼は出される課程を次々とパスし、1879年に商業実務科を卒業した。

1890年11月、すでに有能な実業家として認められていたスムート長老は伝道の召しを受け、ヨーロッパ伝道部へと旅立った。

1895年には、ユタステークス部エドワード・パートリッジステークス部長の副ステークス部長に指名され、1900年には使徒に支持されて、ロレンゾ・スノー大管長から聖任を受けた。

1903年1月、州議会から合衆国上院議員に選出され、以後30年間卓抜な働きをなした。ユタ州選出議員のスムート議員は、教会の印象を高める上で最も貢献した人として名をあげられる。

1933年、ユタへ帰ってからは十二使徒定員会の活発な一員となったが、すでに健康がむしばまれつつあった。41年にわたる使徒の召しは、1941年2月、死をもって終りを告げた。¹

1. *In Memory of Senator Reed Smoot*

「リード・スムート上院議員をしのんで」
ブリガム・ヤング大学出版 1966年。

J・ルーベン・クラーク・ジュニア 副管長は
スムート長老に次のような賛辞を呈した

「私はこの機会に、ひとりの教会員として、今世紀最大の宣教師と考える人の帰還を、天父に感謝したいと思う。それはリード・スムート議員のことである。

私は、ちょうどスムート議員がその公職についた同じ時期に、東部へ移った。その頃私たち教会員に対して何がしかの感謝が存在したことを、私は承知している。あの人はモルモンだと聞かたびに、人々に軽蔑の笑いが浮かぶのを目にしていたものである。スムート議員の30年の在職期間中、私は東部の同じ環境で生涯の大半を過ごしたが、……兄弟姉妹たち今あなたがたに申し上げたい。とにかくも私個人の知恵と理解で判断すれば、彼の働きに匹敵する貢献はほかにない。以前はあざけりさげすんだ人が、今は敬い、尊重している。その上、スムート議員は国家に、だれにも優る類まれなる献身を続けてきた。」²

2. *Conference Report* 「大会報告」1933年4月〔英文〕P.102

「娘のカスティンから、お父さん、お母さんへ」

私は7月、8月と、ウィッツオー兄弟と共にヨーロッパ訪問の特権を得た。そしてこの特別な使命に携わりながら、ウィッツオー兄弟の助力を得て、スカンジナビア諸国を訪れる恵みにあずかった。最後の訪問中、特に私の母の生家を訪れるために、その時間を取ったのである。私は若いときによく「いつか、母さんの国へ帰ってみよう」と母に言ったものである。しかしいろいろなことで延び延びになり、母は60の年で死んでしまっていて、それは実現せずに終わった。それでも私はいつか必ず母の故郷に帰って、親類縁者に会って来ようと思

に決めたのである。母が何百回となく開け閉めした古びた扉を目にし、少年の頃、母から話に聞いていた家の裏手を流れる小川をながめ、よく聞かされていた祖母の手植えの立派な木の陰に立ち、その家屋敷のたたずまいを見たとき、そのときに胸にこみ上げてきた思いを、今はお話する時間はない。兄弟姉妹に申し上げたい。私は、イエス・キリストの福音が母に届いて、母がまだほんの少女だった頃にそれを真実だと知ったことを、心の底から神に感謝したのである。母は、父母や愛する人々の反対と妨害にあいながら、神が生きておられ、イエスはキリストであるという証をみじんも変えなかった。

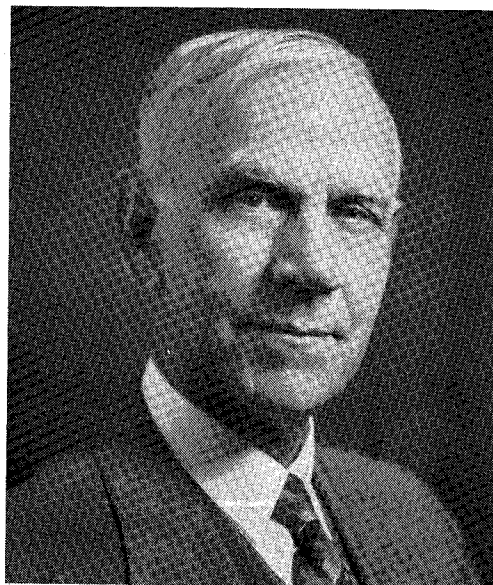
いとこが私に先祖伝来の聖書を持ってきてくれた。裏表紙を開けると、最後のページに「娘であるアンナ・カスタイン・モーリ」と署名のある文章があった。私にはその字が読めなかったので、ウィッツォー兄弟に手早く書き取ってもらい、どんな内容か話してもらった。その一言一句が知りたかった。その文章は、母が家を出た日、つまり母を愛する祖父母が、長くあるまい、すぐに戻ってきてあやまるだろう、神とイエスを打ち消すだろうと考えて、母を追いつ出したその日に書かれたものであった。そのとき、母はまだほんの少女であった。私はここで皆様にその手紙を読みたいと思う。それによって多くの女性が彼女の精神を知り、彼女のようになることを願って。手紙には、福音のために世のすべてのものを喜んで犠牲にした私たちの先祖の精神が込められている。そうそれはイエス・キリストの福音を教える、宣教師の精神である。これは彼女手ずからの手紙であり、愛する祖国に最後の別れを告げる手紙、父母と我家を愛しながら、それ以上にイエス・キリストの福音を愛した少女の手紙である。

娘のカスタインからお父さん、お母さんへ、

この本に書いてある回復されたすばらしい真理を受け入れる勇気が持てますように、神様にお祈りします。排斥されているこの知識が、神様の大きな日が来たときにお父さんお母さんを責める証人にならないように。その日に、わたしたちが喜んでしあわせな気持ちでいっしょになって、神様の栄えの冠をかぶり、みんなが「さあ、来なさい。忠実な子供たち、あなたの働きの報いを与えましょう」と言われるように、神様にお祈りします。このことや、お父さんお母さんが真理を知って受け入れられますようにという気持ちで、わたしは幾度もひとりで泣きました。世の人たちが神様から遠いことを考えると、もっとも涙が出ました。年はすぐに過ぎて、わたしたちがみんな羊飼いのみ言葉を聞いてみこころに従わないと罰を受ける日が近づいています。大いなる王はやってきてこの世を治められます。罪や悪は追い払われます。神様がお父さんお母さんを立派な人たちの中に入れて下さいますように。そんなことを考えると心が安まります。神様は、全人類が悔い改めるようにお恵み下さいます。この言葉を読む人たちがみんな、神様の



お父さんお母さんが真理を知って受け入れられますようにという気持ちで、わたしは幾度もひとりで泣きました。



リード・スムート長老

聖なる書物の本当の目的を知って、罪の重荷を捨てるよう
にお祈りしています。神様がお父さんお母さんを永遠の生
命に導いて下さいますようにお祈りします。

娘であるカスティン・モーリ

ドラメンにて

1854年9月1日

私はイエス・キリストの福音を恥としない。私を生んだ母
の証を恥としない。地の面のどこに行こうとも、王や君主や
世界中のどの階層と交わろうとも、私はすべての人に自分が
末日聖徒イエス・キリスト教会の一員であることを知ってほ
しいと思う。……

「大会報告」1923年10月〔英文〕P.76, 77

「あれは大うそだ」

スムート議員が少年のとき、ブリガム・ヤングがユタ州ブ
ロボに來て、大会の集会で、やがてニューヨークからサンフ
ランシスコまで人の声の通じる日が來ると話した。……

リードの母親は彼を連れて会に出たが、その帰り道、リー
ドは（ブリガム・ヤング大管長の話のことで）「あれは大う
そだよ、絶対そんなことない。あるはずがないよ」と言っ
た。すると信仰深い彼の母は、息子に言った。「いいえ、あ
なたが生きているうちに、大管長が今日おっしゃったことは
本当になりますよ。」リードはその言葉を信じなかった。し
かしそれから時が過ぎ、彼が米国上院議員となっていた間に
ラジオ放送が開通して、ニューヨークからサンフランシスコ
まで語りかけることができるようになった。議員仲間のひと
りが放送事業の責任者となり、開通の記念式典を行なう段に
なって、第一声の演説をスムート議員に頼んだ。彼はニュー
ヨーク市に呼ばれ、その声はアメリカ大陸をまたいで鮮明に
聞こえたのである。

ヒンクレー *Faith of Our Pioneer Fathers*

「先祖、開拓者の信仰」〔英文〕P.207

「私は執事を選ぶ」

フランクリン・デラノー・ルーズベルト大統領のもとで郵
政長官を務めたジェームズ・A・ファーリー氏は（クリード
・）ヘイモンド博士との対話の中でこう言った。「私は国で
も少しは名の通った民主黨員で、リード・スムートは共和党

員だ。しかしスムート氏は、合衆国政府最高の外交官だと思
う。彼は一般情勢の最高の権威者だ。彼のような人をもっと
ほしいものだ。

信頼の置ける筋からの話だが、リード・スムートはもし信
仰を捨てれば、共和党公認の大統領候補に指名すると言われ
たそうだ。モルモンでいたら、大統領に指名されるなど、と
うてい不可能だからね。」

ヘイモンド博士はこう述懐している。「その後15年して、
スムート議員がわたしの事務所に來たときに、話のついでに
ジェームズ・ファーリー氏に聞いたことを話すと、彼は『2
回も全国共和党会議で、教会を捨てれば大統領に指名すると
言われました』と話してくれた。

『大統領がそんなに魅力がないのですか』と聞くと、彼は
向き直ってわたしの両腕をつかみ、こう言った。『君、君は
おそらく私の教会に対する気持をわかっていないのだ。末日
聖徒イエス・キリスト教会の執事と大統領のどちらかを選べ
と言われたら、わたしは執事を選ぶ』と。」

ヒンクレー「先祖、開拓者の信仰」〔英文〕P.201, 202

「スムート議員、私のぶどう酒はお口にあい ませんでしたの」

私は証を失うくらいなら死んだ方がましである。どこに行
ったときにも、自分の証を恥じたことはない。人から「自分
の信条に反したことをしている」と後ろ指をさされるような
ことは一度もしていない。国家の名士が集まるどの会合で
も、ワシントンの有力者から豪勢なもてなしを受けて、宴会
ごとに酒が出されても、私は酒もぶどう酒も一滴も口にした
ことはない。世界に名だたる富豪の婦人に呼ばれて初めて大
晩餐会に出たとき、各自の席に3種類のぶどう酒を盛ったグ
ラスが備えてあった。晩餐会の終りに、女主人は私がぶどう
酒に口をつけないのを見て、「スムート議員、私のぶどう酒
はお口にあいませんでしたの」と言った。

私はそれを機会に、知恵の言葉を私たちが理解しているま
まに説明した。そして婦人にお気を悪くさせないように、そ
のつもりはまったくないのだからと許しを乞うた。私が酒を
飲まないということは、すぐに、ワシントン中に知れわたっ
た。というのも、私はどの宴会でも、どの国の大使館に招か
れても、どんな場合であろうと、それと同じようにしたから
である。私は、あのように、信仰に命じられるまま行動する
勇気が持てたことを神に感謝している。神は何ごとにも成し遂
げられる道を備えずには、民に命じられないのである。

「大会報告」1935年10月〔英文〕P.116

旧約聖書に学ぶ女性像

アータ・M・ヘイル

何人かの女性が、世間一般の女性の地位についてあれこれおしゃべりしていた。だいたい人は妻や母としてとても恵まれていると感じていたが、ひとりの女性が自分の経験した職場での男女差別にぐちをこぼし始めた。「まあ、でも昔はもっとひどかったのよ」と別のひとりが話をした。「聖書の時代に生まれなかったのは感謝すべきかしらね。」そして王妃ワシテの話を始めた。

ペルシャ王妃ワシテ

紀元前 500 年頃、ペルシャは 127 の州を抱える大帝國で、アハシュエロス王は宮殿の庭に諸州の大臣を招き、大酒宴を張った。その 7 日目に、いささか酔いのまわった王は、王妃ワシテの美しさを大臣たちに見せるため、冠をかぶらせてここに来させよと、侍従たちに命じた。

ところが王妃は来るのを拒んだ。アハシュエロス王は面目をつぶし、怒りに燃えた。そこで王は法律と審判に通じた知恵者の大臣を 7 人呼び、「王妃ワシテは、アハシュエロス王が侍従をもって伝えた命令を行わないゆえ、法律に従って彼女にどうしたらよからうか」と尋ねた。

ひとりの大臣が答えた。「王妃ワシテはただ王にむかって悪い事をしたばかりでなく、すべての大臣およびアハシュエロス王の各州のすべての民にむかってもしたのです。王妃のこの行いはあまねくすべての女たちに聞えて、彼らはついにその目に夫を卑しめ、……」

もし王がよしとされるならば、ワシテはこの後、再びアハシュエロス王の前にきてはならないという王の命令を下し、これをペルシャとメデアの法律の中に書きいれて変えることのないようにし、そして王妃の位を彼女にまさる他の者に与えなさい。王の下される詔がこの大きな国にあまねく告示されるとき、妻たる者はことごとく、その夫を高下の別なく共に敬うようになるでしょう。」（エステル 1：15—17, 19, 20）

王と大臣たちはこの言葉に賛成した。アハシュエロス王はすべての男性は自分の家の主人となり、その言葉は妻にとっ

て律法となるべきことを、諸州に書き送った。

慣習が変わり、女性に昔よりも自由が与えられたのは、事実その通りである。しかし、神は同じである。男性も女性も神の被造物で、常に神に愛されてきた神の息子、娘である。女性の使命は、内容こそ違ってはいても、男性の使命と同様に大切に、満足を与えてくれるものである。

聖書のもうひとつの物語では、神に召された指導者である予言者を支持し、仕える女性は、必要に応じて生活に入り用なものや主のみたまや証を祝福されることが示されている。

エライジャを養った婦人

イスラエルに 3 年の干ばつと飢饉があつてから、主は予言者エライジャに北のシドンへ行くように命じ、「わたしはそのところのやもめ女に命じてあなたを養わせよう」と言われた。（列王上 17：9）エライジャが町に着くとひとりの婦人が外でたき木を拾っていた。エライジャはその婦人に一杯の水とパンを所望した。婦人は、パンはなく、あるのはふたりの焼きパンを作るだけの粉と油で、そのパンを食べたあと息子といっしょに死ぬ覚悟だと言った。

エライジャは、まず自分に小さいパンを作り、そのあとでふたりのパンを作ったら、粉も油も飢饉が終わるまでなくなることはない、彼女に言った。婦人が予言者に頼まれた通りにすると、粉と油は、エライジャが何日も滞在しても決して絶えることがなかった。

飢饉の間にやもめの子供が重病にかかり、ついにある日息が止まった。エライジャは男の子を自分の部屋に運び、子供の霊をもとに帰らせてくださいと主に願った。すると男の子は生き返り、エライジャに連れられて母のところへ戻った。やもめは言った。「今わたしはあなたが神の人であることと、あなたの口にある主の言葉が真実であることを知りました。」（列王上 17：24）

今も、すべてを捨てて教会に加わる女性は多い。主は彼女たちを心に留めて、昔改宗して一途に主の道に従ったルツのように、彼女たちを祝福し、報いを与えられるだろう。

報いを得たルツ

ユダヤにエリメレクと妻のナオミとふたりの息子が住んでいた。飢饉があって、一家は偶像崇拜の国モアブへ移った。そこでエリメレクは死に、ふたりの息子はそれぞれオルパとルツというモアブの女と結婚した。しかし間もなく息子たちも死んでしまった。

ユダヤを出てから10年がたち、故郷や昔なじみの人々が恋しくなると、ナオミは故郷へ帰ろうと決心した。ふたりの嫁には実家に帰るように言った。モアブにいれば土地の人の中から夫を見つけることができるだろうと思ったからである。

ナオミが口づけをして別れを告げると、オルパとルツは声をあげて泣いた。オルパは母の家へ戻って行ったが、ルツはイスラエルの神に改宗をしており、ナオミに取りすがってこう言った。「あなたを捨て、あなたを離れて帰ることをわたしに勧めないでください。わたしはあなたの行かれる所へ行き、またあなたの宿られる所に宿ります。あなたの民はわたしの民、あなたの神はわたしの神です。」(ルツ1:16)

ナオミとルツは、大麦刈りの初めにベツレヘムのナオミの昔の家に着いた。ルツは自分とナオミの糧を得ようと、習慣に従って大麦の落穂拾いをした。

ルツが落穂を拾った畑は、ナオミの夫の親戚のボアズの畑だった。ボアズは大麦畑に来たときにルツに目をとめ、刈る人々にあれはだれですかと尋ねた。人々は、ナオミの嫁のモアブの女で、熱心に働きますと答えた。

ボアズはルツに、ほかの畑へは行かずに自分の畑で落穂を拾いなさいと言った。だれにも邪魔されずに、刈り手の食べる食物を食べ、飲む水を飲むようにとも言った。

ルツはボアズを拝し、なぜ外国人の自分に親切にして下さるのですかと尋ねた。ボアズは答えた。「あなたが……自分の父母と生れた国を離れて、かつて知らなかった民のところに来たことは皆わたしに聞えました。どうぞ、主があなたのしたことにより報いられるように。どうぞ、イスラエルの神、主、すなわちあなたがその翼の下に身を寄せようとしてきた主からじゅうぶんの報いを得られるように。」(ルツ2:11, 12)

主はルツの犠牲に対して報いられ、ルツはのちにボアズと結婚し、オベデという息子をもうけた。ルツはオベデを通じてイスラエル王ダビデの曾祖母となり、救い主イエス・キリストの先祖となった。

末日聖徒の全女性は、教会の標準と目標を心に留めなくてはならない。もし時勢に身をまかせて自分を「満足させる」

なら、賞賛と体面を得ようと躍起になって、本当の満足が得られる唯一の道を見失ってしまうかもしれない。夫や子供の必要に添うために自分の大望を幾らか犠牲にする女性は、本当の意味で望みを達成するのである。イエスのみ言葉はそういう人にあてはまる。「自分の命を得ている者はそれを失い、わたしのために自分の命を失っている者は、それを得るであろう。」(マタイ10:39) そのような女性は家の内外の奉仕をバランスよく行なえる人である。なぜなら人を助けたいという動機からで、賞賛や名声を得ようという気持はないのだから。まず大切なのは家庭と家族である。そのような女性は王妃エステルのように、主から支持され、助けられるだろう。

王妃エステルの犠牲

エルサレムは陥落し、指導者層の多くは奴隷として東方の地へ連れ去られていた。アハシュエロスがペルシャ帝国の王になったときには、何百人というユダヤ人が諸州に分散していた。

王妃ワシテが王の前に出るのを拒んで王妃の位を失ったあと、アハシュエロス王の妃選びのために最も美しいおとめたちを宮殿に送る命令が、諸州の役人に届いた。

首都のすさに、モルデカイという名のユダヤ人が住んでいた。彼はおじの娘のエステルを、両親が死んだあと自分の家に引きとって自分の子として養い育てていた。みめも姿もとびぬけて美しいエステルは、王妃の候補として、ほかのおとめたちと共に宮殿へ連れて行かれた。

身じまいと支度の数カ月が過ぎると、いよいよエステルにおめどりの番がまわってきた。王は彼女を王妃に選り、頭に王妃の冠をかぶらせた。

エステルが王妃になって間もなく、ふたりの侍従が王に対して陰謀をたくらんでいることがモルデカイの耳に入った。モルデカイはエステルにそのことを知らせ、エステルは王に知らせて王の命が守られた。

アハシュエロス王は貴族のハマンを選び、王に次ぐ権力を与えた。すべての人はハマンに敬礼するように命じられたが彼はユダヤ人を憎み、虐待したので、モルデカイは彼に敬礼しなかった。ハマンは激怒し、この国には自分たちの律法を守って王の律法には従わない民がいると王に告げた。すると王は、ユダヤ人は、富める者も貧しい者も、若い者も年寄りも、女子供も皆殺してもよいという許可をハマンに与えた。その絶滅の日が定められたことを知って、ユダヤ人の中には嘆きと断食と祈りが満ちた。

モルデカイはエステルに、自分の民のために王に嘆願してほしいと伝言した。王妃エステルの方は、王の詔に対して恐れ気持は抱かなかった。エステルには名誉も地位も威光もあり、身の安全は保障されていたからである。宮廷にはユダヤ人であることが知られず、自分の家族や民の危難を見て見ぬふりをするだけでもできたはずだった。

エステルはモルデカイの願に対して、召されないのに王の前に行く者は、金の笏を伸べて恵みを示されない限り殺されるという法律があると返事した。エステルはそれまで30日も王のもとに召されておらず、禁じられているのに行くことを心配したのだった。

モルデカイは、エステルが王妃となったのはユダヤ人の命を救うための主の思召かもしれないと返答した。エステルはモルデカイに次のような伝言を送った。「あなたは行ってスサにいるすべてのユダヤ人を集め、わたしのために断食してください。三日のあいだ夜も昼も食い飲みしてはなりません。わたしとわたしの侍女たちも同様に断食しましょう。そしてわたしは法律にそむくことですが王のもとへ行きます。わたしがもし死なねばならないのなら、死にます。」(エステル4:16)

モルデカイはエステルの希望通りにした。エステルは3日目に王妃の服装をして内庭に入った。アハシュエロス王は玉座に座っていて、王妃を見ると金の笏を伸ばし、「王妃エステルよ、何を求めるのか。あなたの願いは何か。……」(エステル5:3)と尋ねた。

エステルは「もし王がよしとされるならば、きょうわたしが王のために設けた酒宴に、ハマンとご一緒にお臨みください」(エステル5:4)と言い、王は承諾した。

その酒宴で、王は再びエステルの願いは何かと聞き、エステルは翌日もまたハマンと一緒に酒宴に臨んで下さいと願った。

ハマンはその日帰宅して、妻のゼレシに自分の賜わった数々の栄誉を話した。彼の喜びに水を差すただひとつのことは、宮殿の門のところにモルデカイがいて、自分に敬意を払わなかったことであった。

ゼレシは、絞首台を用意させれば、気持よく王妃の酒宴に出かけられると勧めた。ハマンは、翌朝王にモルデカイの絞首刑を進言するつもりで、絞首台を作らせた。

その晩アハシュエロス王は寝つけなかった。そこで国事の記録を持ってきて読ませると、ふたりの侍従の謀反をあばいたのはモルデカイだったことに気がついた。アハシュエロス王がモルデカイの忠誠に対してどんな栄誉を与えたかと聞く

と、王の侍臣たちは「何も彼に与えていません」(エステル6:3)と答えた。

翌朝早く、ハマンは外庭に来て、モルデカイの絞首刑について王に話をする機を待っていた。王はハマンを近くに召してこう尋ねた。「王が栄誉を与えようと思う人にはどうしたらよからうか。」(エステル6:6)

ハマンは自分のことを言っているのだと思い、大臣たちがその人に王の着た衣服を着せ、王のかぶった冠をかぶらせ、王の馬に乗せて広場を通らせ、「王が栄誉を与えようと思う人にはこうするのだ」と呼ばわらせなさいと答えた。そこで王は、「急いで……ユダヤ人モルデカイにそうしなさい。」(エステル6:9, 10)と命じた。

ハマンは憂えながら王の命令を遂行した。

2回目の酒宴の席で、王はまたエステルに、願いを述べよ、その願いはたとえ国の半分でも聞きとどけると言った。王妃エステルは、「…王がもしよしとされるならば、わたしの求めにしたがってわたしの命をわたしに与え、またわたしの願いにしたがってわたしの民をわたしに与えてください。わたしとわたしの民は……絶やされようとしています。……」(エステル7:3, 4)と答えた。

王はエステルに尋ねた。「そんな事をしようと心にたくらんでいる者はだれか。またどこにいるのか。」

エステルは言った。「そのあだ、その敵はこの悪いハマンです。」(エステル7:3-6)

王は激怒し、ハマンは自分でモルデカイのために立てた絞首台に掛けられて死んだ。ハマンの権力はモルデカイに与えられ、ペルシャ帝国全土のユダヤ人は命を救われた。

昔も今も、女性が幸福な充実した人生を送る鍵は、主と自分の家族を愛し、仕えることである。主はソロモン王を通して、女性の価値は富にはるかに優ると言われた。(箴言31:10-31参照) 天は彼女に信頼を寄せ、ほめたたえる。彼女は一生涯夫のために良いわざを行なう。彼女は家庭と子供たちの世話を引き受け、家族のために食べ物と着物を整え、決して倦むことがなく、貧しい者に手を差し伸べる。言葉と行ないに知恵と親切が示され、子供は彼女を祝福された人と呼ぶ。主を愛する女性はすべての人から敬われ、たたえられるだろう。

末日聖徒の良き女性をこれ以上によく描写するものがあるだろうか。

ヘイル姉妹——2児の母。初等協会中央管理会会員で、現在は教会家庭の夕べ委員会にも属している。ボネビルステーキ部エールワード部所属。

カ ナ ン の 征 服

エドワード・J・ブランド

セミナー・インスティテュート部

ヨルダン川渡河

ヨシュアはイスラエルの民にヨルダン川を渡らせ、カナンの地を所有し始めるよう主から指示された。カナン全体には防備を固めた町が数多く散在していたが、その最前線エリコ^{セツコウ}に斥候が送られた。彼らはもどってきて、エリコの住民が恐怖におののいていることを報告した。（ヨシュア1，2章）

神権の力によってヨルダン川の水がせきとめられ、イスラエルの子らは川



を渡ることができた。1年の中でも増水期に当たる時期にこの驚くべき出来事が起こったことは、民にとって現在ヨシュアに託されている権能がどれほどのものかを示すしるしであった。奇跡的な方法で約束の地に入ったことを記念して、記念碑がギルガルの新しい野営地に築かれた。(ヨシュア 3, 4 章)

ギルガルはエリコに近く位置しており、イスラエルがカナンに攻撃を加え始めた頃の基地であった。ここで誓約

が交わされ、殺りくの天使がイスラエルの子らを過ぎ越したことを祝う記念祭が行なわれた。この地の作物を食べるようになってから、マナはもはや彼らを支えるために与えられなくなった。(ヨシュア 5 章)

注意：記録はイスラエル人の主な戦役を大まかにしか伝えていない。ただ征服に長い年月を要したことと、主がもともと指定された方法では結局征服は最後まで完成しなかったことは事実

である。(申命 7 章, 9 : 1-6, 20 : 10-19)

中央部分の征服

最初の攻撃はエリコに向けられた。7日間ただ包囲しただけで特に何の攻撃をしかけることもなかったが、城壁は倒壊し町は完全に滅ぼされた。イスラエルの斥候を助けたラハブとその家族だけが命を助けられた。(ヨシュア 6 章) 攻撃の矛先^{ほこさき}は次にベテルの近く



にある要さい都市アイに向けられた。最初限られた人数で攻撃し失敗したので、ヨシュアはおとりの作戦を使ってこの町を滅ぼした。(ヨシュア7、8章：アルマ52：19—26参照)

近くのギベオンの民はイスラエル人に恐れをなし、代表をヨシュアに派遣した。彼らは偽って遠く離れた町から来たと言い、主の民の貢進国あるいは属国になるから同盟を結びたいと申し出た。主がカナンの不義な民を完全に滅ぼすように命じておられた(申命7章)にもかかわらず、ヨシュアはこの同盟申込みを受け入れて、契約を結んだ。(申命20：10—15)

ヨシュアはその後間もなくギベオンがカナンの地のほぼ中央にあることを知ったが、彼らの偽りにもかかわらず、契約は神聖であると考えていたのでこれを尊重した。(ヨシュア9：16—27)イスラエル人に貢物を納めるといふギベオン人の契約はその後数百年も守られた。

イスラエル人の力を認めてカナンの南部にあった5人の王は同盟を結び、イスラエルと同盟関係にあるギベオンを滅ぼそうとした。この同盟を結んだ諸王は、それぞれエルサレム、ヘブロン、ヤルムテ、ラキシそしてエグロンの王であった。(ヨシュア10：1—5)包囲されたギベオン人はイスラエルに使いを送って助けを求めた。ヨシュアは契約どおりイスラエルの兵を5人の王の軍にさし向けた。神の助けによってイスラエルは敵を壊滅させることができた。この神の祝福によって、5つの町の王たちは惨敗を喫するにいたっ

たのであった。(ヨシュア10：6—14)

南部への侵入

敗れた王たちは南へ逃げて、ラキシに近いとあるほら穴に身をかくした。しかしイスラエルの諜報部員が彼らをおとし入れたので、後に全員撃ち殺された。(ヨシュア10：15—27)このようにして一部南の町々は指導者を失い、兵を持たなかったため、ヨシュアはイスラエルの兵をリブナ、ラキシ、エグロン、ヘブロンそしてデビルにつかわした。ラキシでゲゼルの王が兵をひきいてカナン人の抗戦を助けようとしたが、彼の兵も敗れた。(ヨシュア10：28—39)

ヨシュアの遠征はカデシ・バルネア地方まで南下し、そこからガザを通過して北上し、丘陵の町々にいたった。(ヨシュア10：40—43)カナン人は著しく弱められはしたが、イスラエル人が一部の町々を確実に所有するにいたるまでには、なお長年の間軍事行動を取り続けなければならなかった。(士師1：19—21)

北部への侵入

イスラエルがカナン南部で町々を滅ぼしていることを伝え聞いた北の町々の諸王は警戒した。これら北部の諸王は、ハゾルの王のもとに同盟を結んで、彼らの領地の中心部メロムの水のほとりでイスラエルと対峙した。カナン人は敗れ、多くの町が滅ぼされた。(ヨシュア11：1—14)以上の大きな戦役が終わっても、イスラエルが全地

を確保したわけではなかったが、イスラエルの民がこの地に定住する基礎を固めることとなった。

注意：イスラエルのカナン征服は、主要な丘陵地帯とヨルダン川西岸部を12支族のために確保した点で成功であった。主な兵力も壊滅させたので、カナンの地から追放される恐れはなかった。イスラエルの勝利を逐一かかげた戦勝報告は、彼らの戦いの範囲を示している。(ヨシュア12章)ヨシュアは年老いて民の中から取られたが、「取るべき地は、なお多く残っていた。」(ヨシュア13：1)

一部の先住民は滅ぼされなかったし、イスラエルの諸部族が受けた相続地の領域内から追放されたわけでもなかった。(すなわちペリシテ人、シドン人あるいはフェニキア人など。ヨシュア11：23, 13：2—6, 士師3：1—4)イスラエルの支族が居を定めた領土内にも数々の町と異民族がそのまま居残っていた。(ヨシュア15：63, 16：10, 17：11—18, 士師1：22—36)

ダンの部族は自分の領土内の住民を統合するにはあまりにも無力だったので、ついに北方へ移動しそこで相続地を得た。(士師1：34, 35；17, 18章, ヨシュア19：47)最後に、後にイスラエルの主都になったエルサレムも、エブス人の要さいであって、何世紀もたつてダビデ王の時代になるまで征服されなかったことを付記しておこう。

(ヨシュア15：63, 士師1：8, 21, サムエル下5：6—9, 歴代下11：4—8)



イラムはヨルダンのたににすんでいました。イラムはすえっこで、ハゼンとミカというおにいさんがいました。

ハゼンはひつじかいでした。ハゼンがひと声よべば、ひつじはいつだってあつまってきます。一びきだって野にのこすことはありません。

ミカはおひゃくしょうです。かり入れどきは、ミカはかまをやすめるときがありません。ミカが畑のこくもつをかるとき、するどいかまのはが、きりきりりとひかります。

さてイラムは、……ハゼンといっしょにひつじをあつめようとしては、しっばいして一びきにがしてしまい、ミカといっしょに畑ではたらいては、ゆびをきってしまいました。

あるとき、おとうさんがいいました。「イラム、わしといっしょに、ぶどう畑ではたらこう。ぶどうのつみかたをおしえてやるよ。」

しかし、イラムはまたしっばいしてしまいました。ぶどうの葉のつゆがかわく前に、足をくじいてしまったのです。

イラムはいいました。「あーあ、ぼくはなにをすればいいんだろう。ぼくにはなにもタレントがないんだ。うまくできるものなんて、なんにもありません。」

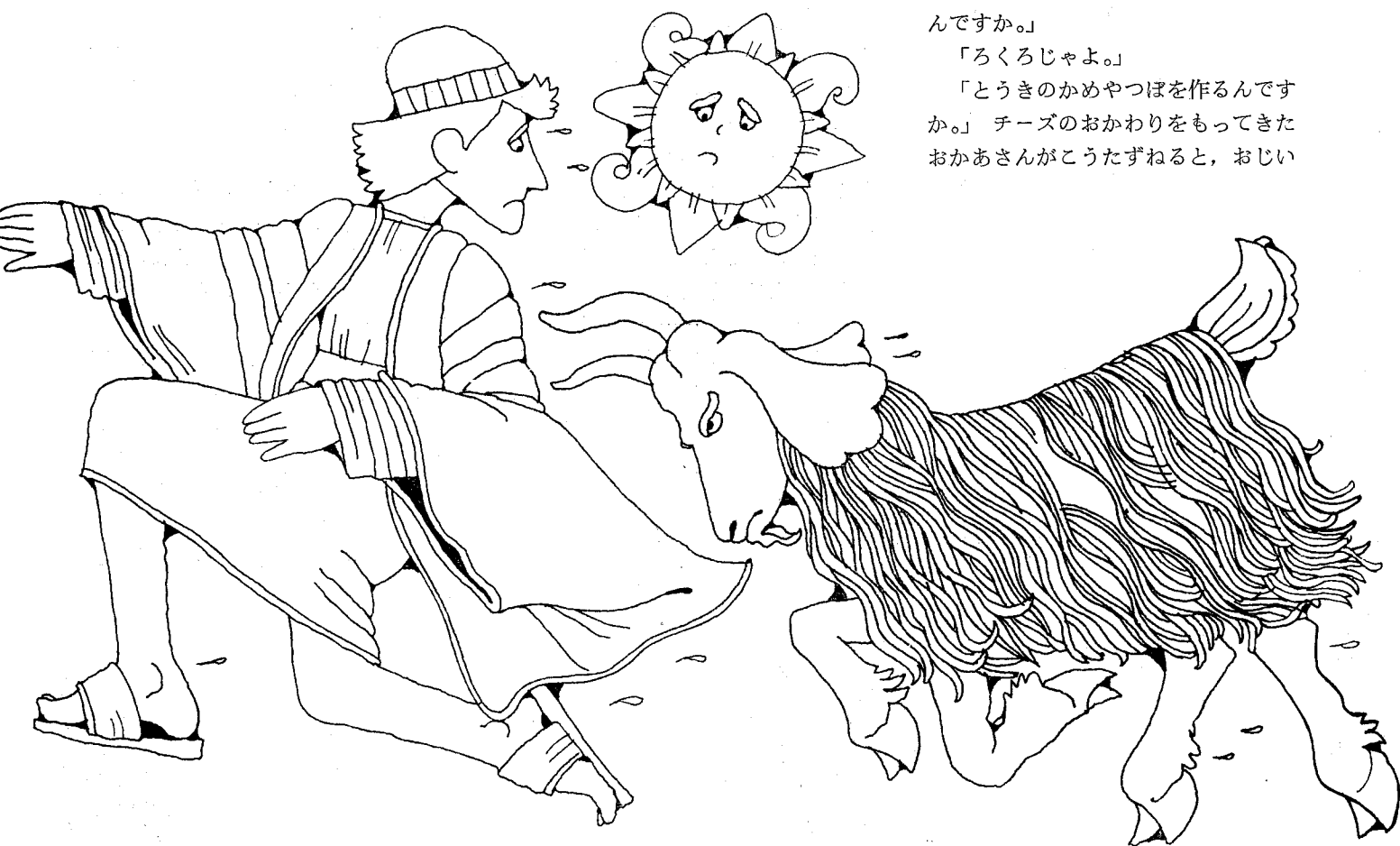
すると、おかあさんがなぐさめてくれました。「わたしたちは、みんなべつべつのタレントをもっているのよ。あなたにも、なにかタレントがあるはずよ、イラム。それを見つけなくちゃ。」

「でも…、どんなタレントだろう。」
イラムはいいました。

イラムの タレント

作 ロザリエ・W・ドス
絵 ディック・ブラウン





イラムは、どうしてもそれがなにか知りたくなって、こうたずねました。

「おじいさん、その大きなもつはなんですか。」

「ろくろじゃよ。」

「とうきのかめやつぼを作るんですか。」 チーズのおかわりをもってきたおかあさんがこうたずねると、おじい

するとおとうさんがいいました。
「まあ、いましばらくはしんぼうして、いろいろなしごとをしてみなさい。そのうちに、おまえにあったしごとが見つかるところだろう。そのときは、おまえもまんぞくできるし、みんなのやくになつこともできるさ。」

そこでイラムは、おかあさんにたきぎをあつめてあげたり、おとうさんの畑の石をひろって、畑をきれいにしておいたりしました。「こんなこと、だれだってできる。畑のそうじがおわったら、なにをしようかな。」 イラムはつぶやきました。

ある日、イラムが畑をそうじしたあ

との、小石の山にすわっていると、ほこりっぽい道を、おじいさんが歩いてきました。おじいさんはせなかに、へんなものをせおっていました。

「つめたい水がほしいんじゃが、のませてもらえないかね」とおじいさんはいいました。

「いいですよ。チーズやくだものも少しもってきてあげましょう。」 イラムはこたえました。

「それはありがたい。」

おじいさんがチーズやくだものを食べているあいだ、イラムはおじいさんが地面におろしたへんなかっこうのものを見つけていました。

さんは、ためいきをつきながらいいました。

「むかし、わしはうでのいいとうきしじゃった。しかし、わしのうでもだんだんにぶってきましてな……」 おじいさんは、ふしくれだった手をひらいてみせました。

「でも、なぜおもいろくろをはこんでいくんですか。」 イラムはたずねました。

「町で売りたいと思ってますのじゃ。」 おじいさんはかなしそうにいいました。

「ざんねんですわ。もうとうきは作らないんですの。」 おかあさんがいい



ました。

「まったくだ。」ハゼンやミカといっしょに家へかえってきたおとうさんもいいました。「わしらは、オリーブ油をいれるつばがほしいんだが。」

「それに、小がたの水さしも」とハゼンがいました。

「わたしは、こくもつを入れるかめがほしい」とミカもいました。

「わたしだって、あたらしいおなべがほしいわ」とおかあさんもいいました。

するとおじいさんはいいました。「わしをしばらくここにとめてくだされば、むすこさんのどなたかに、とう

き作りをおしえてさしあげられるんだが。」

「そいつはいい。ここからそうとおくなくところに、とうき作りにちょうよいねんどのどてがありますよ」とおとうさんがいいました。

そして、おとうさんはむすこたちを見て、いいました。「だれか、とうき作りをならいたいものはないか。」

「わたしはだめだ。わたしはひつじかいだし、ひつじといっしょに外にいるのが、しょうにあっている。じっとすわって、ろくろの使いかたをならうことなんて、とてもできない」とハゼンがいました。

「わたしの手はとうき作りには大きすぎる」といいながら、ミカはざらざらした大きな手を見せました。みんなその手をみてわらいました。

「ぼくはどうだろう。やってみたいんだけど」とイラムはおずおずと口をはさみました。ハゼンとミカはイラムをばかにしてわらいました。

「おまえは、ひつじをあつめるときに、一びきにがしたじゃないか。」ハゼンがいました。

「畑しごとをさせれば、指をきるし。」ミカもいました。

しかし、おとうさんはかんがえました。「わしは、いつもイラムになんでもやってみなさいといってきた。このしごとも、させてみなければなるまい。」

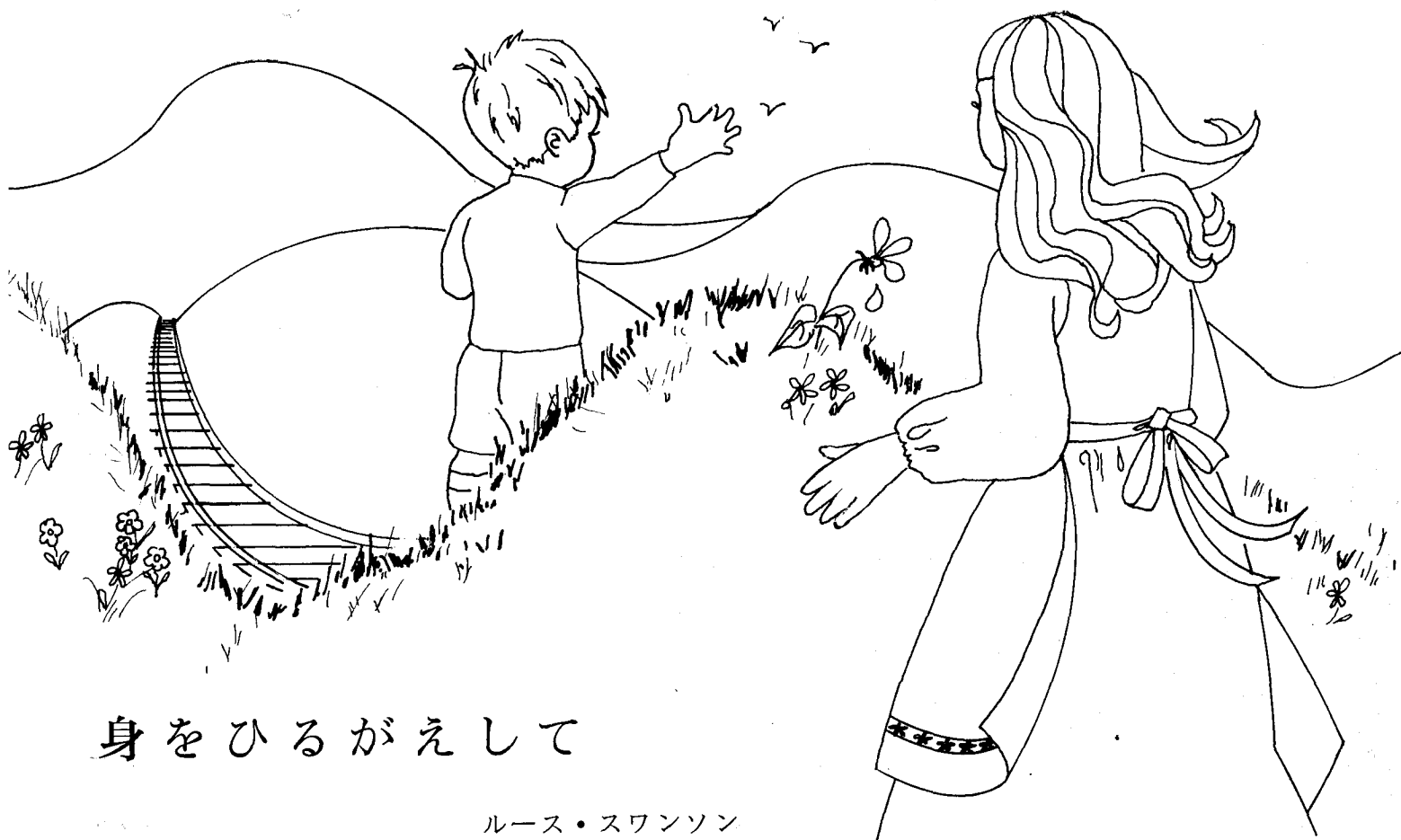
とうきしのおじいさんは、イラムによくおしえてくれました。イラムも、いっしょうけんめいならいました。イラムは、ひとにぎりのねんどが、おかあさんのおなべになったり、おとうさんのオリーブ油のつぼになるのが、うれしくてたまりませんでした。

「おまえさんはねんどをもたせたらまるでまほうつかいじゃ」と、とうきしのおじいさんは、イラムにいいました。おじいさんはイラムの作るとうきを見て、うれしそうでした。

ハゼンはイラムの作ったすばらしい水さしをほめながら、「からかって、ごめんよ」といいました。

「家に、せんぞくのとうきしがいるなんてすばらしいなあ。」ミカもイラムがくれた、うつくしいかめをながめていいました。

イラムは、かぞくの中で一ばんしあわせでした。ついにじぶんのタレントをみつけたのです。イラムは、ひとのやくにたつことができて、しあわせでした。



身をひるがえして

ルース・スワンソン

長いブロードを風になびかせながらカロリーナは山の背にしっかりと立ち、眼下に拡がる眺めに心を奪われたかのようにじっと見いていた。そこからスウェーデン東部の入江に臨むイエブルの町が見え、その向こうのきらめく海には小さなボートや大型船が点々と浮かんでいた。このイエブルの町にカロリーナは住んでいた。

カロリーナの弟エリックはしきりに姉の手を引っぱり、町の北はずれにそびえ立っている、緑深い山まで歩こうと言った。カロリーナは4歳になるエリックの面倒をみるのに慣れていて、弟をわが身のように思っていた。そして自分が行く所にはどこへでも連れて行った。

「見て、レナ、お船が見えるよ！」 幼いエリックは言った。レナはエリックが姉を呼ぶときの名前だった。

「ほんと、とってもきれいね。」 レナは答えた。遠くを見つめていると、一隻の貨物船がイエブルのにぎやかな河岸に沿って並んでいるドックに、ゆっくり入って行くのが見えた。レナとエリックの父親は、そこで職人頭として働いてい

た。乗組み員が船の荷役作業を手際よくするように手配することが父の仕事であった。

「エリック、山をおりて船のおじさんたちが荷物を降ろすのを見に行きましょう。」

「うん、行こう」とエリックはことのほかうれしげに答えた。父親は、ふたりが仕事の邪魔にならないようにしている限り、何も気がかりなことはなかった。レナとエリックのふたりは、以前に梱包用の大きな木枠の上で遊んだことがあり、乗組み員たちも仕事に従事しながらそれを見ては、笑ったり冗談を言ったりしたものだった。

大きな貨物船用のドックと荷役作業を見たさのあまり、ふたりはくびすを返すと一気に山を駆けおりて行った。そして平地までおりてくると、カロリーナが言った。「ドックまで線路伝いに行きましょう。ずっと近道だから。」

途中、カロリーナは見事に咲きほこっているかわいい野の草花に目を奪われ、花束を作ることを思いついた。そしてエリックの手を引きながら、しゃがんで淡いブルーの花を摘

み始めた。そうしているうちに、エリックはひとり枕木の上をびよんびよん飛び越えながら、カロリーナの先を進んで行った。と突然、悲鳴が聞こえた。エリックの叫ぶ声だった。「レナレナ。足が、ぼくの足が！」カロリーナは手にしていた花束もそこそこに弟を助けに走って行った。すると、エリックの足は枕木の下にあいている穴にはまっていた。

「レナ、助けて！」小さなエリックは苦痛で叫んでいる。カロリーナは足を穴からはずそうと、エリックの腕をつかんで力いっぱい何度か引っぱってみた。しかし足は少しも動かない。次にカロリーナは弟の胴に両腕をまわして引き上げようとした。だが、エリックは苦痛に耐えかねて激しく泣き叫ぶばかりであった。どうやら穴にはまったとき、怪我をしたらしい。

「エリック、泣くのはやめて、お姉ちゃんがすぐ出してあげるから。」しかし、カロリーナが力を入れて引っぱれば引っぱるほど、エリックはますます泣くばかりであった。ついに、自分の力だけで助けることが無理だとわかったカロリーナは言った。「エリック、だれか助けてくれる人をさがしてくるわ。私にはできないの。すぐに戻ってくるから。」

そう言うや否や、カロリーナは山のふもとをカーブを描いて延びている線路を駆け下り始めた。カーブを回ったそのとき、カロリーナは遠くに汽車が走って来るのを見た。もう助けてくれる人を捜している時間はない！ 汽車は今にもここに来るだろう。機関手がたとえエリックに気がついたとしても、汽車の速度を落とす余裕はないに違いない。考えただけでも恐ろしかった。カロリーナは身をひるがえしいちもくさんにエリックのもとへ引き返した。カロリーナに何ができるというのだろうか？ 姉の顔に涙を見、恐怖を感じ取ったエ

リックはより一層激しく泣き叫び、カロリーナに抱きついてきた。

カロリーナは恐ろしさでどうしようもなかった。そしてエリックの足をひっぱりながら、助けを請うて天父に祈りを捧げた。「天のお父さま、助けて下さい！ どうしたらよいかわからないのです。どうぞ私を助けて下さい！」すると、すぐに静かな声が聞こえてきた。「靴のひもを解きなさい！」「はい、わかりました。そうします。」カロリーナはその静かな声に従って、震える指を伸ばし靴ひもを解いた。するとどうだろう、エリックの足はスポッと靴から離れたではないか。足から離れた靴はまだ枕木の下にしっかりとハマっていた。エリックを引き上げるとき、カロリーナがあまりにも力いっぱい引っぱったので、エリックはカロリーナによりかかったまま倒れ、ふたりとも激しくしりもちをついてしまった。ふたりが線路から飛び出たそのとき、汽車は煙をはきながらカーブを回ってやってきた。そして汽笛をあげながらふたりの側を走りぬけていった。

汽車が去った後、エリックは叫び声をあげた。「あっ、ぼくの靴みてよ！」 見ると靴は車輪に押しつぶされてペしゃんこになっていた。カロリーナはつぶれた靴を線路から拾い上げるとエリックをなだめるように言った。「靴なんか気にしなくてもいいのよ。お祈りが答えられたことに感謝しなくちゃね。私ひとりでどうしてよいかわからなかったのですもの！」カロリーナはほっとした思いと喜びで、そっと弟を抱きしめた。エリックに靴をはかせてから、ふたりは一緒に並んでてくてくと家路についた。そしてカロリーナとエリックは、どんなことがあったかを父親に話したのであった。

(実話)



小さな お友だちへ

「すべての教会員は宣教師である」

七十人最高評議員会会員

S・デルワース・ヤング

世界中どこでも、教会の子供たちは信仰箇条をくり返し学んでいます。信仰箇条は、私たちが永遠の父なる神さまと、その御子イエス・キリストを信じ、おふたりに喜んでいますが、ということのをべています。そうするためには、私たちはどのようなお方に、いつしたがうのか、そして何にしたがうのか、ということを知らなければなりません。

天のお父さまは、教会をみちびく人としてスペンサー・W・キンボール大管長を召されました。私たちは、大管長と大管長が私たちの指導者になるよう任命される人々にしたいがいます。キンボール大管長と大管長を助けるふたりの人、N・エルドン・タナー副管長とマリオン・G・ロムニー副管長の3人で大管長会を構成しています。

大管長会は教会のすべてのことを管理しますが、援助が必要です。そこで天のお父さまは、十二使徒定員会をお与えになりました。定員会というのは、ひとつの目的をもっていっしょに行動する人々の集まりをいいます。十二使徒たちはおたがいに話し合ったり、大管長会を助けたりします。また十二使徒は、イエスがキリストであることを世の人々に証する特別な証し人です。それに彼らはよく集まって話し合ったり仕事をしたりするので、ふつう十二使徒評議員会と言われていいます。

天のお父さまは、7人の人からなるグループを任命されました。この人たちは十二使徒評議員会の指示のもとに与えられた責任を果たします。彼らは七十人最高評議員会として知



られていますね。七十人最高評議員会は教会の七十人を管理し、すべての伝道のわざを指揮します。463 ページの写真は七十人最高評議員の人たちです。

現在、教会にはおよそ2万3千500人の七十人がいます。七十人は、教会の会員でない人たちをさがして、福音の原則と儀式を教えます。これはちょうどみなさんが信仰簡条の中で習ったのと同じですね。

七十人のおもな責任は伝道ですが、教会員ひとりひとりもみんな宣教師です。そして、いつでもどこでも人々に福音をわかちあわなければなりません。

みなさんは、福音をもっとよく学び、お友だちやとなりの

人のよい模範となることによって、宣教師として働くことができるのです。みなさんの中にはいつの日か大きくなって家をはなれ、いろいろな国の人々に福音のメッセージを伝えるため伝道に出る人もいることでしょう。またそのほかにも、家庭や学校で、宣教師として働く人もいます。けれどもどこで福音をわかちあっても、天のお父さまはきっと喜んでくださいます。場所が問題ではないのです。なぜなら天のお父さまは伝道のみわざが、みなさんと同じように、ほかの人々にもすばらしい祝福をもたらすことをごぞんじだからです。



七十人最高評議員会

前列左から：S・デルワース・ヤング、ミルトン・R・ハンター、A・セオドア・タトル

後列左から：ポール・H・ダン、ハートマン・レクター・ジュニア、ローレン・C・ダン、レックス・D・ピネガー



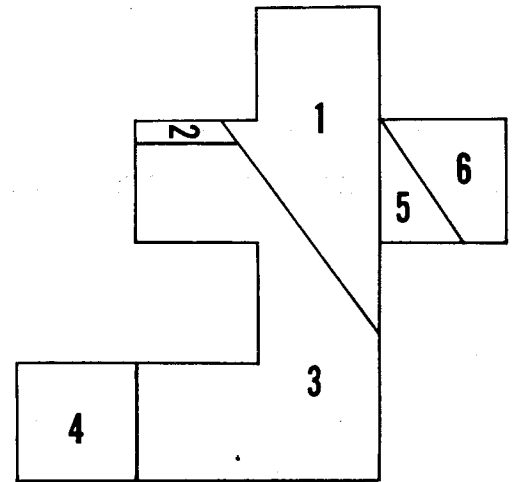
おもちゃばこ

☆点をむすんでみましょう

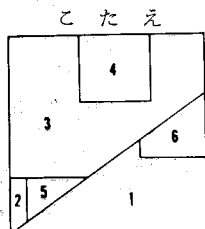
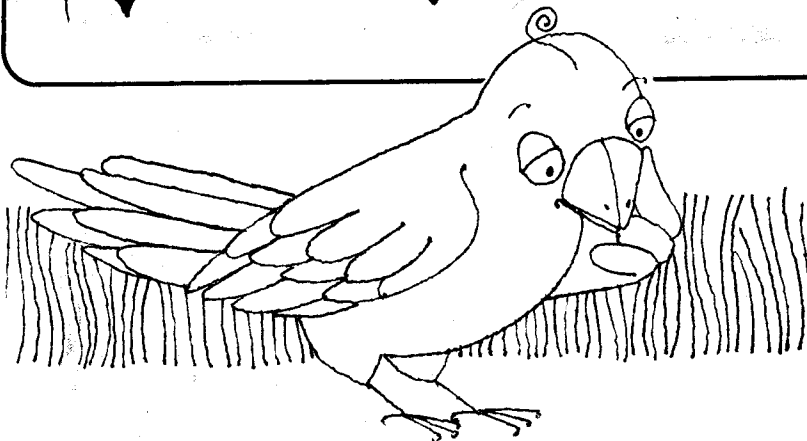
← 1 から58まで点をむすびましょう。

庭に何がかくれているのか、わかりますよ。

ビバリー・ジョンストン



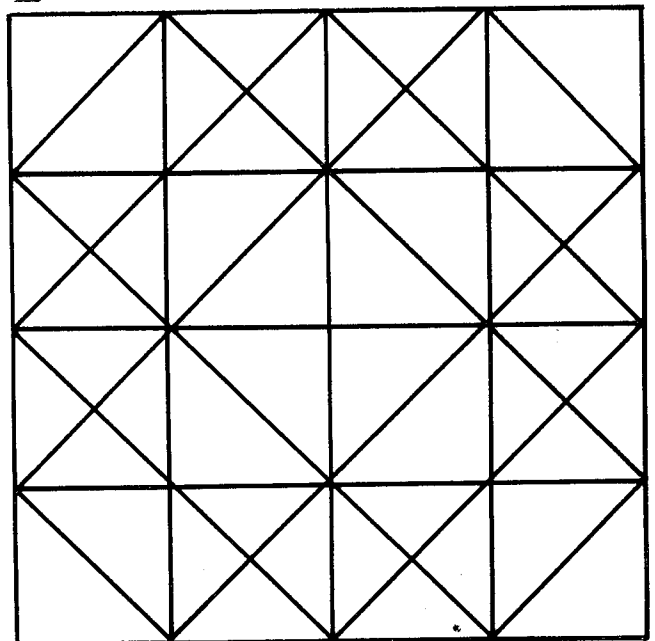
☆ 上の図を厚紙にうつして、ていねいに切ってください。それらをあわせると正方形がひとつできます。



☆ 正方形と三角形がいくつあるでしょう。これはちょっとむずかしいかもしれません。

ミルト・ハマー

こたえ
正方形 44
三角形 160



質 疑 応 答

ここで与えられている解答は、解決の一助とするものであり、教会の教義として公式に宣言するものではない。

「回復された教会の初期の時代に聖徒たちは啓示を受けましたが、それと同じように、私達も現在啓示を受けているのでしょうか」



解答／ロムニー副管長

答えは「然り」です。

1820年の最初の示現に始まって、予言者ジョセフ・スミスが生きている間中、主は末日聖徒イエス・キリスト教会を組織し運営するための指示を与えると共に、福音の偉大な基本原則と儀式の大部分を啓示されました。これらの啓示は、最初予言者に顕わされたときと同じように今日の教会にも適用され、教会で役立っています。明らかにこれらの啓示は改めてもう一度啓示される必要はありません。

教会を導いていくためにさらに新たな啓示を与える必要があると主が思われたときは、いつも生ける予言者にそれが与えられてきました。例えば主は予言者ヒーバー・J・グラント大管長に福祉プログラムを啓示されました。グラント大管

長の副管長をつとめ、このプログラムを推進したJ・ルーベン・クラーク・ジュニア副管長は、次のように言っています。

「今私はあなたがたに申しあげる……聖霊の啓示がグラント大管長に与えられた。この件だけでなく、他の件についても同じことが言える。聖霊からもたらされるこの啓示、あるいはあなたがたが望むなら靈感と呼んでもよいが、この啓示によって、グラント大管長は偉大な福祉計画に着手した。」

(1951年8月3日ユタ州中部福祉地域で、J・ルーベン・クラーク・ジュニア副管長が語った話)

私が教会幹部になってから、主は数多くのことを予言者に啓示されました。ふたつの例をあげれば、相互調整プログラムと、急速に増大しつつある会員をステーク部、伝道部において管理するための拡充されたプログラムがあります。

この教会で管理役員の職にあり、その召しを全力を尽くして果たしている人は皆、当教会の初期の時代と同じように、今日でもその人の役職に伴う義務を遂行するために啓示を受けています。

主の声に耳を傾ける教会員は皆啓示によって、それぞれ個人に対する導きを受けることができます。(教義と聖約84:46, 47参照)「求めよ、さらば与えられ、叩けよ、さらば開かることを得ん」(教義と聖約4:7)という言葉は空虚な約束ではありません。主がオリバー・カウドリに言われた次の言葉は、私たち全員に対する言葉でもあります。

「誠にまことにわれ汝に告ぐ。……汝ある知識を受くべしと信じて信仰をもて真心より求むる如何なる事の知識をも、これを得んことは汝の神にして汝の贖い主なる主の今生きて在るが如く正に確なり。

然り、見よ、われ今汝に來りて汝の心の中に留るべき聖霊によりて汝の智と情に告げんとす。

そもそも、見よ、これは啓示の『みたま』なり。見よ、これはモーセがイスラエルの人々をして乾ける土を踏みて紅海を渡らせこれを導きし『みたま』なり。」(教義と聖約8:1-3)

イエス・キリストの教会が地上に存続するかぎり、この啓示の原則は生きています。そして私たちは主の教会が今後決して地上から取り去られることも他の民に渡されることもないという保証を受けているのです。

マリオン・G・ロムニー
第二副管長

「催眠術についてどう思いますか」

解答／エルズワース兄弟

教会の指導者は昔から、教会員が心理制御の課程を受けたり、催眠術を行使する、あるいは実験したりすることに反対してきました。1902年に十二使徒のジョン・W・テイラーは次の



ように言っています。「私は声をあげて宣言したい。これは主なる神の目から見て憎むべき行ないである。」(Conference Report「大会報告」1902年4月〔英文〕P.76)

また十二使徒のフランシス・M・ライマンはこう言っています。「私は自分が理解し、見てきたことから、催眠術を使わないよう忠告したい。私自身について言えば、決して催眠術を受けたいと思わないし、私の子供が受けるのを許可したいとも思わない。主が私たちに与えられた自由意志は、私たちが受けているものの中でも最大の賜である。しかし、他人の心が私たちを支配し、人の心が私たちの体と機能を制御し始めるやいなや、私たちは完全に自分の自由意志を人に明け渡してしまうのである。そして私たちは催眠状態にある間、何をするにも全く無意識なのである。催眠術をかける人は、催眠状態を意のままに延ばすことができる。彼は、良いことをするように命令するかも知れない。しかしその場合、仮に催眠状態からさめた後で自分のしたことを覚えていても、その行為から何の益も得られない。自由意志に基いてなされたのではないからである。また催眠術をかける人々は、ばかげたことやショッキングなこと、さらには悪事を働くように命令するかも知れない。術をかける人の意志が私たちを強制するからである。

催眠術は、この地上に人々が住み始める前に、サタンが天父に提案した計画に非常によく似ている。サタンは人々に良いことをさせ、本人の意志とはおかまいなしに全員を救おうとしたのである。他方救い主は全員に自由意志を与えて、救いを受け入れようとする人だけを救おうと申し出られた。天父なる神はサタンの計画を退け、人が自主的に行動し、自分

の行動に対して責任を取るというこの真実の原則を貫くため、三分の一の子らを犠牲にされた。」(『催眠術を使ってもよいだろうか』「インプループメント・エラ」6巻〔1903年4月〕P.420)

1972年4月の「神権会報」には次のような指示が掲載されています。「グループ催眠の実演、あるいは一般の心理制御課程に加わった人々が不幸な結果に陥っているという報告が届いている。また、ある教会の指導者が催しとして催眠の実演を行っているとの報告もある。指導者はこのような活動に加わらないように教会員に勧告すべきである。また報告されているように、教会の指導者はこれらを後援したり、奨励したりしてはならない。」

私は催眠術が使われていろいろな結果が現われたのを見ました。催眠術が使われるのを見て、私は、人が催眠術に身を任せるとき、その人は自分の意志の一部または全部を他の人に明け渡すことになると確信しています。事実その人は催眠術にかかっている間自由意志を失っています。あるいは催眠術をかけられたときに、さめた後に何かするよう暗示された場合、催眠後も自由意思の喪失は続くのです。催眠術の影響がどれほど強力であるか、催眠状態がどれほど異常なものであるかを本当に知っている人はひとりもいません。そして昨今の催眠家の言説とは反対に、人々は催眠状態にあるとき、普段、善悪をわきまえられる状態にあるときはしないようなこともさせられることがあるのです。さらにまた他人を完全に制御できる立場に立った医師がどんな大きな誘惑を受けるかは、なかなかわからないものです。

だれに診察してもらうかを決めるのでさえ、実はむずかしいことなのです。一般に名医といわれている人でも、同僚に言わせれば最良の医師でないかも知れません。ですから私たちは皆、最高の規準でしかも細心の注意を払って医師を選ばなければなりません。この選択がまずいと、悪くすれば体は満足に健康を回復しないかも知れませんし、適切な選択を行なっていれば早期回復するものを、はるかに時間がかかることにもなりかねません。

しかしあなたは不滅の霊をだれに信頼して任せるのでしょうか。あなたの自由意志、善悪を判断する意志を、安心して委ねられる人を探すにはどうすればよいのでしょうか。まかされた人の慰みに、または他の人々を楽しませるために、あるいはあなたの諸問題、例えば体重軽減、悪い習慣の排除を助ける目的で、あるいは幼年時代の問題を思い起こすのに役立つと考えて、あなたの善悪を判断する意志をだれに委ねるのでしょうか。それほど信頼できる人とは一体だれでしょうか。これがこの問題の基本であり、最もむずかしい点です。永遠の霊をいじりまわしてもらってもさしつかえないと言えるほど信頼できる人がいるのでしょうか。現在、「催眠術についてどう思いますか」と聞かれれば、教会員は催眠術に積極的に参加すべきではない、というのが私の信念です。

ホームー・エルズワース博士
メルケゼデク神権MIA中央管理会

「われら何をか聞く」

み業を推進する会、導かれる者が導く者を支持する

大管長 スペンサー・W・キンボール

愛する兄弟姉妹。距離の遠近を問わず、今日私たちはみなこの聖なる集まりに臨んでいる。聖会はイスラエルの時代より聖徒たちの間でよく知られてきたものである。聖会には様々な種類があるが、一般には、神殿の献堂、あるいは新しい大管長会を支持するために開かれる特別な集会、またはロレンゾ・スノー大管長に与えられた什分の一に関する啓示のように、ある啓示を支持するために招集される神権者の集まりを指してきた。

予言者ジョセフ・スミスは聖会についてこう語っている。

「汝ら切にここに停まれよ。而して、正にこの最後の王国に於ける最初の働き人たちの聖会を招集せよ。」(教義と聖約88:70)

ジョセフ・スミスとブリガム・ヤングは、神権の各職を代表する人々を含む全会衆からまず支持を受けた。ブリガム・ヤングが支持を受けたのは1846年3月27日であったが、そのときは評議員会によって「イスラエルの陣営全体を管理する長に全会一致で選ばれた。」(B・H・ロバーツ *A Comprehensive History of the Church* 「教会概史」第3巻[英文] P.52) 次いで支持を受け、ホザナの歓呼があった。

ハロルド・B・リー大管長に至るまで、歴代大管長はいずれも聖会において教会の神権者より支持を受けてき



た。リー大管長が支持を受けたのは1972年10月6日である。

初めて聖会を導入したのはジョセフ・スミスである。ジョセフは説教を終えた後、大管長会を初めとして、各定員会に、自分を予言者として聖見者として進んで認める気持があれば起立してその意を表わし、祈りと信仰によってそのように支持してくれるように求めた。すべての定員会が次々にこの求めに応じた。次に予言者は、聖徒の全会衆にも起立してその意を表わすように求めた。

予言者はさらに続けて、神権定員会に、次いで一般の聖徒に、教会の大勢の指導者と評議員会への支持の気持を起立して表明するように求め、それと同様の方法をもって承認された。

ジョセフ・スミスは次のように語っている。

「すべて満場一致で支持された。そこで私は全会衆に予言した。聖徒たちがそれぞれの職(種々の教会の定員会を指す)にあるこれらの兄弟たちを支持する限り、主は彼らを祝福したもう。……イエス・キリストのみ名によって断言する。天の恵みが彼らと共にある。また、主の油注がれた者がこの時代の人々に証を述べ、主の言葉を宣言するときに、もしそれを受け入れるならば、彼らは祝福されるであろう。しかしもし受け入れなければ、神の裁きが彼らに下り、主のしもべを拒む町や家は滅ぼされるであろう」と。続いて、ホザナの歓呼があった。(「教会概史」2巻, P.416—418参照)

今日皆さんは教会がどのように機能を果たしているかを目にした。そして主の力強い業を見、すべてのことがどのように全会一致で進められるかを確認した。導かれる者が導く者を支持するのである。この会は自ら指名権を行使できる会である。従って、全教会員に出席を呼びかけた。

私たちは今日皆さんから支持を受けたので、今自分の義務を果たそうという決意を堅くしている。私たちは皆さんの支持の挙手を深く感謝している。私たちが今願っているのは、これまでの時代、神権時代を通じて受けつがれてきた主の勧告に完全に沿って正しく人々に助言と勧告を与えることだけである。私たちは皆さんを愛している。だから完全な進歩と喜びと幸せを受けてほしいと思っている。ご存知の通り、これらは神の予言者や指導者を通して宣言された神の訓戒に従ってこそもたらされるものである。

私たちは天父とその御子イエス・キリストに思いを向けるとき、平和の福音を宣言する天の声の美しい合唱を耳にすることができる。

私たちは民の代表者として、昔コロサイの聖徒たちに使徒パウロが与えた提言に従う。「……上にあるものを求めなさい。そこではキリストが神の右に座しておられるのである。」

「あなたがたは上にあるものを思うべきであって、地上のものに心を引かれてはならない。」(コロサイ 3:1, 2)

「キリストの言葉を、あなたがたのうちに豊かに宿らせなさい。そして、知恵をつくして互に教えまた訓戒し、詩とさんびと霊の歌とによって、感謝して心から神をほめたたえなさい。」(コロサイ 3:16)

従って私たちは、この愛の美しい調べを心に抱いて、一致団結して主の業を押し進めるつもりである。この主の業は1世紀だけのものでも、1千年間のものでもない。それは永遠にわたるものだから。

永遠の美しい調べに耳を傾けるときに、何が聞こえるであろうか。

父祖アダムに直接語りかける神の声を聞くことができる。

「われは神なり、われはこの世を造れり。また人をその肉体をとらざる前に造りたり。」(モーセ 6:51)

そして父祖アダムは、世の創造以来基本となってきた数々の真理を私たちに告げた。福音は昨日も今日も、また永遠にわたって変わらないものである。そして私たちには次のように伝えられている。「……神の子始祖の罪を贖いたまえり。贖われたれば両親の罪その子らの頭に帰すること能わず、彼らは創世の前より全ければなり。」(モーセ 6:54)

アダムはバプテスマを受け、聖霊を授かった。

そしてアダムを通して、私たちは神の御子であるエホバの降臨を知った。また墮落した人アダムが死より贖われることも知った。アダムはこう言っている。「……われこの世に生きて悦びを受け、われまた再び肉体に在りて神を見ん。」(モーセ 5:10)

死すべき状態になったために、アダムとイブは子孫を持つことができるようになった。そしてその結果、地上の家族は永遠に手中におさめているのである。この予言者とその妻は「神を呼ぶことを」止めなかった。(モーセ 5

:16)

「かくの如くして、一つの聖き儀式により、説かれたる福音により、またその福音のこの世の終りまで世にあるべしと宣べられたる神の御旨によりて、よろずの物すべてアダムに授けられたり。されば誠に件の如くなりき。」(モーセ 5:59)

従ってこれは永遠である。

アダムは神権を受け、また覚えの書に系図を保存した。

神よ、私たちにこの力強い起源を与えて下さったこの予言者がいることを感謝する。

また私たちのために道をまっすぐに備える助けを及ぼしたもうひとりの予言者がいることを感謝する。その予言

るまで、神の創造物を目にした。また聖典にはこう記されている。

「エノクとそのすべての民は神と共に歩めり。彼はシオンの真中に在りしに、シオン無くなりぬ。神これを取り挙げて、自らの懷に受入れたまいしが故なり。」(モーセ 7:69)

また耳を傾けてみよう。何が聞こえるだろうか。人類の父である義人アブラハムの声が聞こえる。神よ、聖人であり義人であるこの予言者アブラハムをお与え下さったことを感謝する。アブラハムは、主なるエホバと親しく言葉を交わした私たちの先祖である。

アブラハムは天文学者となり、天空と宇宙に関する多くの秘れたる知識を授けられた。そして、当時天文学の中



支持の挙手をするアロン神権者

者はエノクである。彼は神と言葉を交わし、神の告げられたままに予言し、神の道を教えた人であった。

「見よ、わが『みたま』汝の上にある、されば汝の言うところわれすべてこれを正しとせん。されば、山々は汝の前より逃げ去り、河はその流る途を変えん。汝はわれにありわれ汝にあり、この故にわれと共に歩け。」(モーセ 6:34)

この神の予言者は神と共に歩み、世の初めからキリストと万人の復活に至

るまで、神の創造物を目にした。また聖典にはこう記されている。エノクとそのすべての民は神と共に歩めり。彼はシオンの真中に在りしに、シオン無くなりぬ。神これを取り挙げて、自らの懷に受入れたまいしが故なり。アブラハムは、主なるエホバと親しく言葉を交わした私たちの先祖である。アブラハムは天文学者となり、天空と宇宙に関する多くの秘れたる知識を授けられた。そして、当時天文学の中

アブラハムは、息子イサクを犠牲にするように求められたとき、イサクは

生きて、おびたしい子孫を持つであろうとの約束を受けてはいたが、超人的な信仰をもってその息子を捧げた。なぜならアブラハムには、たとえイサクの命が取られても、神には「死人の中から人をよみがえらせる力がある」という揺るぎない信仰があったからである。(ヘブル11:19) それゆえ、私たちはこの偉大な予言者を神に感謝している。

ではまた耳を傾けよう。何が聞こえるだろうか。

予言者モーセの声が聞える。のろわしい捕われの身からイスラエルの自由を嘆願する声が。主はモーセを受け入れられると、燃えるしばの中から声をかけ、次のように命じられた。「……足からくつを脱ぎなさい。あなたが立っているその場所は聖なる地だからである。

……わたしは、あなたの先祖の神、アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神である。」(出エジプト3:5, 6)

そこでまた私たちは、主の前に光を輝かした偉大な予言者モーセのゆえに「感謝を神にささげん」と歌う。

再び耳を傾けよう。何が聞こえるだろうか。主の教会の導き手であったペテロに語るエホバの声が聞こえる。

「人々は人の子をだれと言っているか。」(マタイ16:13) この問いに対して、一点の疑いもなく確信をもって答える偉大な予言者ペテロの声が聞こえる。「あなたこそ、生ける神の子キリストです。」(マタイ16:16) また、変貌の山での経験を思い起こし、決して弱まることのない証を述べるその声が聞こえる。

「わたしたちの主イエス・キリストの力と来臨とを、あなたがたに知らせた時、わたしたちは、巧みな作り話を用いることはしなかった。わたしたちが、そのご威光の目撃者なのだからである。

イエスは父なる神からはまれと栄光とをお受けになったが、その時、おごりかな栄光の中から次のようなみ声が

かかったのである、『これはわたしの愛する子、わたしの心にかなう者である』。

わたしたちもイエスと共に聖なる山にいて、天から出たこの声を聞いたのである。」(Ⅱペテロ1:16-18)

イエスがはりつけの刑を受けた後、背教が起こった。そして何世紀もの間、霊的な暗黒が厚く地を覆っていた。その後、機が熟し、前の時代と同様に示現と啓示が開け、偉大な目ざめが訪れるのである。

ではまた耳を傾けよう。何が聞こえるだろうか。

大きな疑問をもって森の中でひざまずく少年の声が聞こえる。その声は尋ねる。真理とは何か、私はどの教会に入ればよいのか、と。この人こそ、最後の神権時代の門戸を開いた偉大な予言者である。全能の父なる神が、その傍らの御方を指して、「こはわが愛子なり、彼に聞け」(ジョセフ・スミス2:17) という声が聞こえる。これこそ、多くの時代にあって最も壮観な示現と言えるだろう。

さらに耳を傾けると、別の声が聞こえる。「われは神の子イエス・キリストなり。……われは始めなり終りなり」(教義と聖約11:28, 110:4) と、その声は告げる。

主のみ手にある道具として、永遠の福音を回復し、また過去十数世紀の間失われていたすべてのものを回復するようにと、若い予言者に主の言葉が下された。それから、これらの示現と啓示は何年もの間続き、エホバの声がたびたび聞かれた。こうして、この若い予言者を通して、福音の真理と神権、使徒職、権威と権能、それに教会の組織、すべてこれらが地上に回復されたのである。その結果、啓示と永遠の真理が再び地上に存在し、受け入れるすべての人々に授けられるようになった。こうして神の計画は回復され、人は神の完き力と栄光を身に受けることができるのである。

再び耳を傾けて、予言者ジョセフ・

スミス声を聞こう。その声はこう告げている。「兄弟よ、われらまことに偉なる大義に向って進まざらんや。進み行きて退くことなかれ。奮い起てよ、兄弟たち。進み進みて勝利に至れ。汝ら喜べ大いに喜べよ。世の人、歌声を張り裂けしめよ。死者よ、王インマニエルに永遠讃美の歌を語り出だせ。インマニエルこそ創世の前より、われらをして死者をその囚屋より贖うを得しむることを定めたまえり。そは囚人は釈さるべければなり。

山々は喜びの声を挙げよ。汝ら谷よ、皆声高く叫べ。すべて諸々の海と乾ける地とは、汝らの永遠なる王の爲したもう驚嘆すべき御業を語れ。河よ、小川よ、谷の流よ、歓びの声を挙げて流れ下れ。森よ、野の樹よ、みな主を讃えよ。堅き巖よ、喜びに泣け。日よ、月よ、暁の星よ、共に唱え。神の子らよみな喜びの声を挙げて叫べ。永遠の創造物よ、御名をとこしえに宣べよ。われまた汝らに告ぐ、われら天より聞く声は如何ばかり榮あるや。その声はわれらの耳に、榮と救いと誓と不死不滅と永遠の生命と、また王国と公国と権能とを告ぐるなり。」(教義と聖約128:22, 23)

これらの声が聞こえ、これらの予言者が語った。今日は主の日である。私たちは主のみ手の中にあり、回復された福音は今地上にある。

私たちは皆さんのために働くつもりである。また皆さんに対する愛を心にみなぎらせて、ふさわしい栄えある行く末に皆さんを導くため、最善を尽くすつもりである。

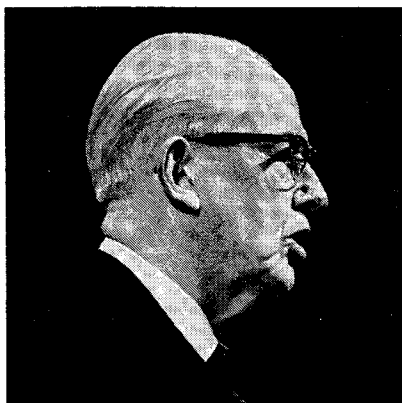
前を見つめてすきに手をかけ、上を見つめて光に目を向け、恐れ、おのき、愛をもって御父の業に携わる。私たちは天父が現在も生きておられることを知っている。また、栄光を受けた御子イエス・キリストも生きておられる。さらに、主の業は神の業であることを私たちは知っている。私たちは主イエス・キリストのみ名によってこの神聖な証を申しあげる。アーメン。

伝道—偉大な務め

教会の最大の使命は人の救いである

十二使徒評議員会会長

エズラ・タフト・ベンソン



この栄光に満ち満ちた安息の日、皆様の前に立つ私の心はへりくだり、感謝の気持で一杯である。キンボール大管長、このタバナクル合唱団の美しい姉妹たちをはじめ私たちすべてが、今の歌のように、愛する予言者であるあなたのために共に祈っている。新たに十二使徒会の一員に加えられたL・トム・ペリー長老に申し上げたい。あなたはこの地上で最もうるわしい仲間に入れられた。私たちはあなたを十二使徒会に喜んで迎え入れたい。また十二使徒補助に召されたJ・トーマス・ファイアンズ、ニール・A・マックスウェル両長老をも同じ気持をもって迎え

たいと思っている。

兄弟姉妹、私たちの愛する指導者、故ハロルド・B・リー大管長のことを思うにつけ、私の心は他の多くの人々と同じようにいたむのである。私たちはこの世において55年来の知己であった。いや、この世だけでなく前の世においてもそうであったに違いない。しかし私はまた、私の心に平安と慰めとをもたらすひとつの確信を得た。それは、神の予言者が時ならずして天に召されることはないということである。リー大管長のこの地上での召しは見事に達成された。今や彼は、幕のかなたこなたで進展しつつある主の偉大なる計画にあって、さらに重要な責任に召されて働いているのである。彼はキリストのような特質を備えた、霊的な洞察力の鋭い人であった。

彼が召された大きな目的は、人の子らに救いをもたらすことであった。主は予言者ジョセフ・スミスにこう言われた。「汝ら、人の値は神の前に大いなることを憶えよ。」(教義と聖約18:10)

人の子らに救いをもたらし、昇栄にいたらしめること、これこそ教会の一大関心事である。リー大管長は、何に

も増してこの偉大な計画に心を注いだ。また彼が、シオンの若者に、全世界の天父の子供たちに、そして洋の東西を問わず真理の大義に対して霊的な影響を及ぼしたことに感謝したい。

私は30年間、キンボール大管長の隣に座を占めてきた、私たちは同じ日に十二使徒評議員会に加えられた。私はこの方の偉大さをよく知っている。そして愛し尊敬している。真実彼は気高い神の人、謙遜で靈感あふれる神の予言者である。私は心から彼を支持する。そして彼と共に、人種や信条、国籍、政治的見解の別なく、天父の子供たちすべてを愛している。

私はキンボール大管長と彼の副管長たちが、リー大管長の指導の下に進められてきたプログラムにおいて主要な役割を果たしてきたことに喜びをおぼえる。なぜなら、男女を問わず人格を築き、両親や家庭や個人が直面する数々の問題に解答を与えるプログラムで、これ以上のものはないからである。私たちはキンボール大管長の靈感あふれる指導の下で、この同じプログラムをさらにゆるぎないものとし、確立していくつもりである。今日ほどのプログラムが必要とされる時期は、かつてなかった。

モルモン教のメッセージ、すなわちイエス・キリストの回復された福音が世の人々の前に明らかにされてから140余年経つ。

1830年6月、サミュエル・ハリソン・スミスはニューヨーク州の田舎道をとぼとぼ歩いていた。彼は教会が回復されて初めて伝道の旅に出た人である。彼は兄である予言者ジョセフ・スミスにより宣教師に按手任命された。この偉大な宣教師は伝道の初日、40キロもの道を歩き続けたが、背中の、かの新しく見なれない書物は1冊も売れなかった。空腹と疲労でふらふらになったサミュエルは、ある家で一夜の宿

を請うた。しかし自分の使命について説明するかしないうちに返ってきた言葉はこうだった。「うそつきめ、とっとと出て行ってくれ。そんな本を持ってやるやつなんか、1分たりとも家へ入れさせんぞ。」仕方なくまた歩き続けたが、彼の心は失意と悲しみに打ちひしがれるばかりであった。そしてその夜はりんごの木の下で一夜を明かした。

回復された教会、末日聖徒イエス・キリスト教会の、この神権時代の伝道事業は、このような全くみじめな状態が始まったのであった。

かの最初の宣教師が、みすばらしい姿で混乱した世に救いのメッセージを伝える旅に出かけてから、144年の歳月が流れた。その間この大事業は、神の子らを救うという神が与えたもうた重大な命を遂行しつつ、たゆまず前進を続けてきた。そしてそれは、この「特殊な民」の歴史の中で、まさに劇的な章となっているのである。なるほどキリスト教世界の推移を見ても、義務に対してこれほど勇気を示し、喜んで犠牲を捧げ、限らない献身を払ってきた例はほかに見当たらない。聖徒たちは、男も女も子供も、すべて物質的な報いを何も望まずにこの一大事業に身を捧げてきたのである。

これらの主イエス・キリストの使いたちは、自らを主の使いであると固く信じていた。そして、ぬかるみや雪の中は重い足をひきずり、川は泳いで渡り、衣食住も与えられないままに召しに応えてきたのであった。

父親や息子たちは自ら進んで家族を残し、仕事も捨てて、肉体的な苦痛と容赦ない迫害に耐えながら、世の至る所へ歩を進めて行ったのである。後に残された家族は、しばしばひどい難儀にあいながらも、彼らの「宣教師」のかてを得るために喜んで一生懸命に働いた。このような努力を続けていく人々の心は、すべて喜びと満足であふれ

ていた。家にいる家族は特別な祝福を受けていることに、感謝の気持ちを示し、宣教師たちはこのときのことを、「生涯で最も幸福な時期」とまで言っているのである。

1830年以来教会の専任宣教師として働いた人は内輪に見積もってみても14万から15万を数え、このほか専任の召しを受けないながらも雄々しく伝道の業に携わった各地方の男女も、相当な数にのぼることは言うまでもない。現在でも2万名以上の人々がこの業に奉仕している。

海外へと赴くこの忠実な使者たちは、延べ9千8百万日から1億5百万日を伝道の業に費やし、自らの生活のために4億2千万ドルから4億5千万ドルの金を自前でまかなっている。これには赴任や伝道に必要な交通費、赴任先での教会による管理費、その他各地方独自の伝道諸経費は含まれていないのである。

恐らく全世界のどこを捜してみても、義を押し進めるためにこれだけの人が自らの意志で犠牲を捧げている姿を見ることはできないであろう。彼らは必ずしも富裕なわけではない。しかも、「主のみ業」のために、昔から現在に至るまで律法として定められている什分の一の律法に従って、全収入の十分の一を献金するように期待されている人々なのである。

なぜだろうか。時間や財産、そして家庭の安らぎや家族の暖いつながりを犠牲にさせるものは、一体何なのだろう。

それは、神がこの地上の人間に再びみ姿を現わされ、過去の時代の人々が受けていたと同じ賜や祝福と共にその教会を再び設立されたこと、また聖なる神権を再び付与され、子供たちの祝福のためにそれを行行使する権能を与えられたこと、これらに対する燃えるような確信があるからではないだろう

か。確かにそうである。疑問の余地はない。これは末日のこの偉大な業が神のみ業であるとの一人一人の証のなせる業であり、全能者の命に対する信仰、また神の誓約の子としての私たちの義務、神が生きてましまし子供たちを愛してくださるということ、そしてあらゆる国々にいる人々の人格を築き上げ救いをもたらすという使命が私たちに託されているということへの確信、これらが私たちを献身へとかりたてるのである。

父祖アダムの時代から予言者ジョセフ・スミスならびにその後任者の時代に至るまで、この地上に神権が存在した時代における主要な義務は、救いにかかわる福音の永遠の原則、すなわち救いの計画を宣べ伝えることであった。(モーセ5:2)ノアの長年にわたる伝道をはじめ、古代のすべての予言者の教えを考えてみようではないか。

(モーセ8:16-20)彼らはそれぞれの時代にあって、人の子らに福音のメッセージをもたらし、切迫している裁きを逃れる唯一の手段である悔改めを叫ぶように命じられたのであった。主は古代の使徒の偉大な使命について実に明確に述べられた。「……あなたがたは行って、すべての国民を弟子として……」(マタイ28:19)

復活したモロナイは、ジョセフ・スミスのもとを訪れた最初の頃、あることを強調した。それは予言者の名前が善きにつけ悪しきにつけ人々の間に知れわたり、新しい聖典とそれに載せられた回復された福音が「末の世にわが選びたる弟子たちの口より」世に出されるということであった。(教義と聖約1:4)

教会が組織される1年以上も前に主はこう言われた。「……一つの驚嘆すべき業、まさに人の子らの中に現われんとす。……見よ畑は早白くして刈り入れを待つが故なり。」(教義と聖約4

：1，4）そして初期の時代の改宗者たちは次のような義務を果すように勧告された。「この故に、汝ら神の役務に出で立たんとする者は、終りの日に臨みて神の前に咎なくして立たんため、すべからく心をつくし、勢力をつくし、思をつくし、体力をつくして神の役務をなせ。」（教義と聖約4：2）

初期の宣教師に与えられた約束は偉大なものである。彼らはこう告げられた。すなわち「人の値は神の前に大いなる」ものであり、人が「もし生涯今の世の人々に向けて悔改めを叫ぶことに力を尽し、唯一人の人たりともわれに導かば、わが御父の国に於て彼と共に汝らの悦び如何ばかりぞや。」（教義と聖約18：10，15）

これらの約束はすべて、1830年4月6日に教会が正式に組織される以前に与えられたものである。この時期にはほかに多くのすばらしい約束がなされた。

そして教会が組織されるや、人々はバプテスマを受け、ふさわしい兄弟たちは神権の職に按手聖任され、悔改めを叫び回復された福音のメッセージを

伝える務めに任命された。そしてそれから後の啓示にはさらに大きな約束が含まれていた。その多くが、福音を宣べ伝えるという神聖な義務が回復された教会に課せられているという内容であったことは論を待たない。その年の秋、予言者を通して主から次のようなみ言葉が与えられた。

「われ誠にまことに汝らに告ぐ汝らはゆがみて片意地なる今の世の人々にわが福音を宣べんため高鳴るラッパの響の如く汝らの声を挙げんために召されたり。

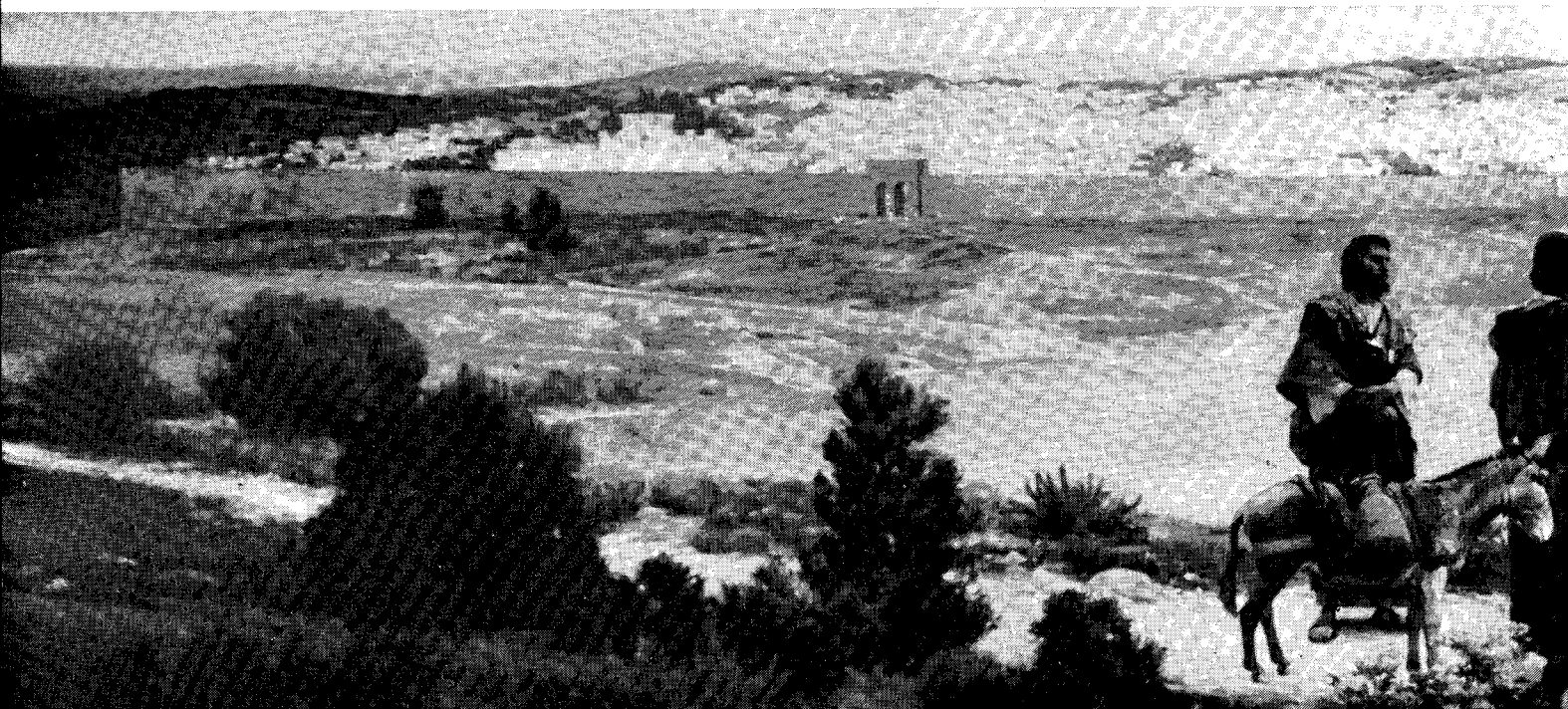
見よ、畑は早白くして刈り入れを待つ。然も日はすでに傾き働き人をわが葡萄園に呼び入る最後の時なり。」（教義と聖約33：2，3）

主は謙遜な使いたちにはっきりと言われた。「われ再び来る時のために主の道の備えをなせばなり。」（教義と聖約34：6）また彼らの語る言葉は、聖霊の力によって鼓舞され、彼らが忠実である限り人々にとって主のみこころとなり聖典の言葉となるという約束も与えられた。また主は次のように断言しておられる。すなわち彼らは「世の

人を試さんために遣わ」されたのであり、「心に衰えを感じることなく、また心暗くなることもな」ければ、頭髮が「神知りたまわずには」「一筋も地に落」ちることがないのである。（教義と聖約84：79，80）

もはや驚くにはあたらない。彼ら一人一人の証と上に述べたような主の感動に満ちた約束によって、この新しい福音の神権時代の幕は切って落されたのである。数も少なく貧しい環境にありながらも、彼らは金銭的な報いを全く望まず、一人一人が犠牲を払いながら力強く前進して行った。これに加えて主が宣言された事実も重きをなしていた。すなわちキリストの再臨とそれに伴う世の終り、つまり悪の最後に備えるにあたり、その証明として福音が与えられるのがこれで最後だということとである。彼らの義務は裁きを逃れるよう警告することであった。これは今日の私たちの義務でもある。彼らは私たちと同じように、主が語られた次の言葉を理解していた。

「そは、無人の境となるほどの懲しめを蒙りてこの世は空しくなり、世の



人々はわが来る時の光輝により焼きつくされてことごとく亡び失するに至ればなり。

見よ、この言はわれまたエルサレムの滅亡に就きて正にその民に告げたる如く語るなり。この事のかつて今までに実証せられし如く、今またわが言は実証せらるべし。」(教義と聖約5:19-20)

1831年末、主がその教会に与えられた啓示の出版を考慮するときが訪れた。このときまでに教会は数多くの啓示を受けており、悪魔がさし向ける迫害の手をものともせず、非常な発展を見せていた。主は長老たちの集会で予言者を通じ、教会の人々に向けた偉大な啓示を与えられた。「誠に主の声はすべての人々に及ぶものなれば、一人ものがる者なし。」(教義と聖約1:2) 今まで与えられたいかなるメッセージも、この全世界の人々に向けて語られた回復された福音のメッセージほど明確で、また力強いものはほかにない。以前は疑問があったかもしれないが、この言葉により疑問の余地は全くなくなったのであった。私たちのメッ

セージは全世界に向けられたメッセージである。

教会が教義と聖約を主の言葉として受け入れていることを認めながら教義と聖約第1章を読む人は、なぜ私たちが全世界いたるところに宣教師を送るかということに疑問を抱いたりしないであろう。主要な義務のひとつであるこの伝道の業は、まさに教会の会員の上に課せられている。なぜなら主がこう言われたからである。「而して、この末の世にわが選びたる弟子たちの口より、すべての人々に警めの声は及ばん。」(教義と聖約1:4) そして主の約束が続く。「この末の世の弟子たちは進み行けど、一人もこれを止むる者なからん。そは主なるわれ、彼らに命じたればなり。」(教義と聖約1:5) さらにこれらすべては「汝ら(この世に住める人々)に公にせんためわが彼らに与えしところ」のものであると述べている。(教義と聖約1:6) そして主のみ声が地の果てにまで及ぶことを明らかにした後、主はこう指摘された、「されば、主なるわれ、この世に住める人々に襲い来るべき禍を知れば、

わが僕ジョセフ・スミス(二代目)を呼び天より語りて彼に誠命を下せり。」(教義と聖約1:17)

そして他のあらゆる神権時代にもそうであったように、現在も逃れる手段が予言者を通じて啓示されている。主はこのように強調しておられる。「…主なるわれは、これらの事を進んですべての人に知らせんと思うなり。そは、われは人々を偏り見る者にあらざれば……」(教義と聖約1:34, 35)

勧告の結びとして主は「誠命をしらべ」るよう奨励しておられる。これらの戒めは人類に祝福をもたらすために啓示されたものである。なぜなら「われらは真実確なる誠命にして、その中に言われたる予言も約束もすべて成就さる」からである。(教義と聖約1:37) 主は言われる。「わが言は過ぎ行くことなくして成就すべし。わが声にて言わるるも、僕らの声にて言わるるもみな一つなり。」(教義と聖約1:38) 私が引用したこの啓示が与えられてから2日後、主は教会に対してこう告げられた。「わが教会の長老たちを遙かに離れたるもろもろの国民に遣わ



して…万国の民を訪わしめ……」（教義と聖約133：8）

このように私たちは、全世界に住む末日聖徒として、これらの偉大な業への証を胸に、教会に課せられたこの偉大な義務を、へりくだり感謝の心をもって引き受けるのである。私たちは天父の子供たちの救いと昇栄という天父の大事業に携わる機会があることを幸福に思う。私たちはこの地上における王国建設のために、主が祝福された時間と財産を喜んで捧げようではないか。これは私たちの第一の義務であり、同時にすばらしい機会である。この精神はいつの時代にあってもイエス・キリストの教会の伝道活動の特徴をなすものである。そしてこの時満ちたる神権時代の訪れを示す指標となったのである。忠実な末日聖徒のいるところには、この大義のために喜んで犠牲を払おうという精神がどこにでも見られる。大管長会は、第2次世界大戦の最中に世の人々に向けてこのような声明を発表した。「我々の、また教会のいかなる行為も、神がお与えになる命令をさまたげることとはできない。」

（Conference Report 「大会報告」
1942年4月〔英文〕P. 91）

要するに、私たちは主の業、すなわち王国の設立と発展、義の拡大のためにすべてを捧げるのである。これこそ大いなる責任である。キンボール大管長は、木曜日に行なわれた地区代表セミナーにおいてこの大いなる責任を強調された。私たちはこのチャレンジを感謝して受け、主の力を祈り求めながら前進して行こうではないか。

この大事業は神のみ業である。主イエス・キリストが主御自身の教会である末日聖徒イエス・キリスト教会を通じて導かれるみ業なのである。私はこのことをへりくだり、感謝の気持をもって証する。イエス・キリストのみ名により、アーメン。

あなたの信仰の 盾を強くしなさい

教会員である両親はみな子供たちに主に近くあるように
教えなければならない。

十二使徒評議員会会員

L・トム・ペリー

私は大管長に感謝しています。この総大会は私にとって特別な会です。実に胸一杯です。私は先程、教会員の皆様の挙手により、思いもよらない地位に支持されました。このように特別な状況にありますので、今朝は少々私事に関する話をさせていただいてもお許しいただけるのではないかと思います。

私の育った家庭では、教会幹部を愛し尊敬するように教えてきました。初等協会卒業の条件のひとつとして十二使徒の名前を覚えることがありましたが、私は、父が時間をさいて、暗記するのを助けてくれたばかりでなく、幹部の一人一人についても忍耐強く教えてくれたことを今でも思い出すことができます。

事実ラドガー・クロウソンからチャールズ・A・コーリスに至るまで、当時の十二使徒の名前を今すぐにもあげることができますし、彼らの生涯の出来事もよく覚えています。

この召しについて思いめぐらしていた私は、ふとこう考えました。もしも



家庭の夕べで今日の十二使徒について話す父親がいたらどうだろうか。その父親は私について何を語るだろうか。

いろいろ考え、さがしあぐねた結果、子供たちに話して聞かせても良いと思われることがひとつありました。それは私が、イエス・キリストの福音を愛し理解していた両親のもとに育ったということです。私の両親は、パウロがエペソの聖徒にあって書いた次の勧告の言葉をよく理解していました。「最後に言う。主にあって、その偉大な力によって、強くなりなさい。悪魔の策略に対抗して立ちうるために、神の武

具で身を固めなさい……すなわち、立って真理の帯を腰にしめ、正義の胸当を胸につけ、平和の福音の備えを足にはき、その上に、信仰のたてを手に取りなさい。それをもって、悪しき者の放つ火の矢を消すことができるであろう。」(エペソ 6:10, 11, 14-16)

雨の日の朝両親は、帽子やレインコート、雨靴を身につけさせてくれました。そしてそれと同じように、来る日も来る日も私たちを、神の武具で固めてくれたのです。家族の祈りで神権者である父がひざまずき、主に悪しき者の放つ火の矢から家族を守って下さいと祈るとき、信仰の盾が厚くされるのです。私たちの盾は強くされていきました。そして、事あるごとに両親の盾に身を寄せることができたのです。

愛にあふれた両親は、私たちが地上に生を受けた瞬間から、私たちのために注意深く信仰の盾を築いてきました。このことを知った上でこの人生の旅路を歩めたということは、いかに心強かったか知れません。

この盾がどのように力を発揮するか例をあげてみましょう。海兵隊にいたある日のこと、休暇が出て皆で出かけようということになりました。しかし出かけて間もなく私は、一緒に出かけた仲間があまり良くない連中だということに気づいたのです。同時に彼らが私を誘ったわけもわかりました。彼らは私がどんな標準を守っているか知っていたのです。帰るときになっても私はしらふでいて、酔った自分たちを介抱してくれると思っていたのです。

そうこうしながら私たちはロサンゼルス市電に乗り、あるダンスホールに向かっていました。仲間はすでにアルコールを飲み始めており、私はすぐ

にも彼らと別れようと思いました。あの保護の盾が働いたのはこのときでした。陰に私のために祈る両親の祈りがあることを私は知っていました。電車が止まって新しい乗客がどっと入ってきました。乗り込んできた人々のおかげで、私は仲間と離ればなれになり電車の後ろの方に押しやられてしまいました。すばらしい若人の一団に会った



のはこのときです。間に立っている私を見つけると、ひとりがこう話しかけてきました。「やあ、水兵さん、私たちはモルモン教徒です。私たちの教会について何か知っていますか。」

私は「もちろんです」と答えて、彼らと一緒に電車を降り、ワード部の社交活動に向かいました。

信仰の盾は身近にあったのです。私

がふさわしくあって時が来れば天使のような人を主の神殿に連れて行き、祭壇でその人と永遠に結び固められるよう、私を悪しき者の放つ矢から守っていたのです。

私は自分の経験から、子供たちの代わりに救い主イエス・キリストに対する信仰の盾をおく尊い両親に恵まれることがどんなに大切であるか、身をも

って知りました。私はこの盾が確かに力を持つことを証します。神の子は皆この経験を味わうべきではないでしょうか。すなわち、まず朝父親から家族への祝福と信仰の保護の盾をもらい、それから家を出てその日の活動に入るのです。

キンボール大管長、私はあなたが私に下さった主に仕えるこの召しを心か

ら喜んでお受け致します。私はあなたの召しが神の召しであることを知っています。私はあなたの中に、エジプトのパロが昔ヨセフを見て、この人こそ「神の霊をもつ」人だと言ったその同じ特質があることを知っています。

(創世41:38)

私は、何らかの方法でこの定員会で奉仕することにより、あなたが背負っている重荷を少しなりとも分け持たせていただければと思っております。

ベンソン十二使徒評議員会会長、私はあなたを愛し、あなたの偉大な指導力を尊敬しています。私には、天の王国で御父に仕える心構えができています。私にできることでしたら何でもいたします。いかようなりともお使い下さい。

そしてこれまで共に働かせていただいたすばらしい同僚、ハンクス長老とファウスト長老へ。私たちの間に育かれた兄弟愛はすばらしいものでした。私がこの召しに応えることができるように、何と忍耐強く指導して下さいましたことでしょう。おふたりに私の感謝の気持ちをお伝えしたいと思います。

そして今日私の声を聞くすべての人々へ。神が生きてましますことと、イエスがキリストであり、スペンサー・W・キンボールがまことに主の予言者であることを証します。さあ、来て私たちの仲間に加わって下さい。私たちはあなたの信仰の盾を強くするお手伝いをしましょう。この盾を強くすることによって、あなたがたは、自分と悪しき者の力との間には強力な防衛線があって、いつも自分を守っていてくれるという安心感を得るでしょう。イエス・キリストのみ名により話しました。アーメン。

神に仕える決意

召しに応える新しい教会幹部

十二使徒評議員会補助

J・トーマス・ファイアンズ



私は、恵まれて良い父母から生まれた。両親は、すでに墓のかなたにいますが、天使のような母と気高い聖徒然とした父はきっとこの召しを喜んでいて違いない。私は家族を愛している。

過去数カ月、私は聖典を読みたいという食欲なまでの気持ちにかられていた。この大会で私の身に起こったことを考えると、ロムニー副管長が言われた聖霊がこの種の霊的な備えが私に必要なことを感じられたためかもしれない。

旧約聖書と高価なる真珠を読んで、私は救い主の降臨の様子を心に描くことができた。アブラハムと彼の子孫が受けた祝福、責任そしてチャレンジが私の心に明確に刻まれた。

新約聖書を読んで、私の心はベツレヘムに行き、かいばおけのあった所を訪れた。また心の眼でガリラヤの海に展開した過去の様々の神聖な出来事をかきまることができた。そして空になった墓の前で感謝の念に満たされ、頭を深く垂れたのであった。このように起こったすべてのことが私を少し天界へ近づけたのであった。

モルモン経からは、この地に導かれたリーハイや他の人々の永遠の子孫が従順であったときに祝福を受け、不従順であったときに苦難を受けた様を読んだ。そして天父なる神が時には逆境をも使って子らを訓練し、完成させようとされた様を一望のもとに見たのであった。

主の王国が今日確立されてから間も

ない頃に数々の啓示が与えられたが、その近代の聖典から引用するなら、次の真理をあげるのが最も適切であろう。すなわち「……三人の管理大祭司…当教会の大管長会なる定員会を構成す」（教義と聖約107：22）ることと、十二使徒会が「教会の大管長会の指揮下に於て、……教会を設立し、よろずの国民に於ける教会のあらゆる事務を」行なうことであり（教義と聖約107：33）、「……およそ聖霊に感じたる時語るところはことごとく聖典の言」となる（教義と聖約68：4）ということである。

以上の言葉が心に刻まれた今、私はこれらの任じられた兄弟たちの前に畏怖の念をおぼえるのである。中でも私は内務伝達部の顧問を務めて下さった4人の十二使徒から多大な恩恵を受けた。

献身的な同僚のおかげで、今日のこの聖典の言葉、すなわち今大会の説教は、4月が終って5月に入るとエンサイン誌に掲載されるであろう。私たちはこの現在の聖典を考えることによって、主のみこころ、主の思い、主の言葉を知ることができる。

この瞬間にも内務伝達部の他の部門の人々がこの大会の状況を逐一10数カ国語に同時通訳している。

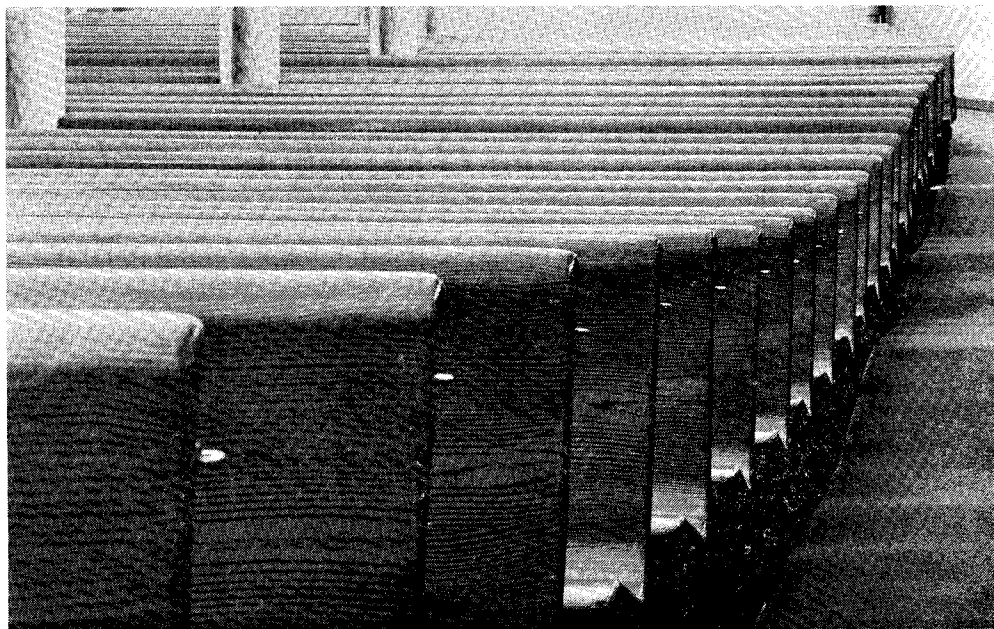
ここであまり細かな数字をあげるのは適切でないかもしれないが、他にも素晴らしい同僚がいることを感謝する気持で、この9月から始まる年度の教材が、すでに93パーセント用意できていることを報告させていただきたい。残りの教材もここ1週間以内に完成する予定である。私は同僚たちを心から愛している。

第一の戒めは、心を尽くし、勢力を

尽くし、思いを尽くし、体力を尽くして主を愛するように求めている。「第二もこれと同様である。『自分を愛するようにあなたの隣り人を愛せよ。』（マタイ22：37，39）私たちは隣り人を愛している。隣り人も私たちを愛していると私たちは信じている。例えば昨日も、手製のレモンクリームパイとサラダを持ってきた隣り人がいた。

4人の娘を含めて5人の娘とその家族は、妻を非常に慕っている。彼女はこれらの永遠の霊に良い影響を与えているとき、主に対する愛を示しているのである。教会に奉仕してきた私の生涯を通じて、妻はいつも笑顔で私を助け励ましてくれた。これ以上気心の合った妻、支持してくれる妻はいないであろう。

キンボール大管長、靈感あふれる両



タバナクルの長椅子

隣りの家から食物が私たちの家に運ばれ、私たちの家からも彼らの家に食物が運ばれる。このようにして私の永遠の伴侶は、隣りに奉仕したいという望みを実践に移している。この、外に現われた行為は、妻の心の底深く流れるものの現われにすぎない。妻は高い所に立って絶えず模範を示し、私と子供たちを引きあげてくれる。結婚した

副管長、ベンソン十二使徒評議員会会長、そして定員会を構成する特別な証し人である十二使徒へ、私たちは心と勢力、思い、体力を尽くして皆様を助ける決意をしています。私と妻はひとつとなって主のみ業のためにできる限りのことをする決意であります。イエス・キリストのみ名により、アーメン。

イエスが歩まれた道

キリストは私たちが歩む道を示された

十二使徒評議員会会員

トーマス・S・モンソン



愛する兄弟姉妹、私は感激のあまり胸がいっぱいである。この記念すべき日に皆様と私は、主イエス・キリストのみたまを豊かに受けてきた。この教会は主の教会であり、主の名前をいただいている。主の予言者は、私たちにこの世の束縛を越えさせ、天の高みに引き上げて下さった。私たちは心に誓いを立てて支持の挙手をした。神の王国は、決してそれることなく永遠の道を前進していく。

昨年12月の寒い日に、私たちはこの

由緒あるタバナクルに集まって、私たちが愛し、尊敬し、付き従ってきたハロルド・B・リー大管長をいたみ、弔辞を述べた。その予言にあふれた言葉、強力な指導性、そして献身的な奉仕は、私たち全員に完成を目指して進みたいという望みを与えた。リー大管長は「神の戒めを守り、主の道に従いなさい。主の足跡をたどりなさい」と鋭い言葉を宣言された。

同じ日の夕方遅く、私は数日前に着いていた旅行代理店のパンフレットに何気なく目をとめた。それは目を見はらせるような色彩で印刷されたもので、説得力に富む宣伝文句が載っていた。

内容は、ノルウェーのフィヨルドからスイスのアルプスまでのパッケージ旅行であった。そしてほかに、聖地のベツレヘムへ、すなわちキリスト教の発生地へ招く企画もでていた。このパンフレットの一番下に、簡潔ではあるが「さあ、イエスが歩まれた道を歩いてみましょう」という強烈な誘いの

言葉が書かれていた。

私の心は再び、神の予言者リー大管長とキンボール大管長が述べた、「主の道に従いなさい。主の足跡をたどりなさい」という勧告にもどっていった。そして私はある詩人の言葉を思い浮かべた。それは、次のような詩である。

私は今日

イエスがはるか昔歩まれた所を歩いた。

イエスがたどられた道を、
ゆっくり、敬虔な思いにひたりながら。

当時の小道は、

そのまま残っていて、
平和があたり一面に漂っている。

私は今日

イエスが歩まれた所を歩いて
そこにイエスの存在を感じた。

道はベツレヘムを通っていた。

ああ、何と懐しい思い出だろう。

ふつつつとよみがえってくる。

あの幼い足が歩き回った、

ガリラヤの小さい丘が続いている

オリブ山、栄光に輝く光景。

イエスが前に知れたもうた所。

私はうねりながら流れる力強いヨ
ルダンの流れを見た。

遠い昔と同じ姿だ。

私は今日、

イエスがひざまずいた所でひざま
ずいた。

イエスがたったひとりで祈られた
所で。

そこはゲッセマネの園。

私の心から恐れが去った！

私は重い荷を取りあげた。

そしてイエスをすぐそばに感じながら、
カルバリの丘を登った。
イエスが十字架の上で亡くなった
所へ！

私は今日
イエスが歩まれた所を歩いた。
そして主を何と身近に感じたこと
であろう。

—ダニエル・S・トゥーヒッグ

主を身近に感じるのに聖地を訪れる
必要はない。イエスが歩まれた所を歩
むためにガリラヤの海岸やユダヤの丘
を歩く必要はない。

事実、イエスの言葉が私たちの唇に
あり、イエスのみたまが私たちの心に
宿っていれば、またイエスの教えが、
私たちの生活にとけこんでいれば、現

地の旅路を歩む中にもみなイエスの歩
まれた所を歩むことができる。

私たちがイエスにならって、未来に
確信を抱き、御父に生きた信仰を持ち
ながら、また相互の間に純粋な愛を抱
きながら歩むことができるように、私
は願っている。

イエスは「失意の道」を歩まれた。

聖なる町のことで悲しまれたイエス
の嘆きが私たちにどれほどわかるだろ
うか。イエスは言われた。「ああ、エ
ルサレム、エレサレム、預言者たちを
殺し、おまえにつかわされた人々を石
で打ち殺す者よ。ちょうどもんどりが
翼の下にひなを集めるように、わたし
はおまえの子らを幾たび集めようとし
たことであろう。それなのに、おまえ
たちは応じようとしなかった。」(ルカ
13:34)

イエスは「誘惑の道」も歩まれた。

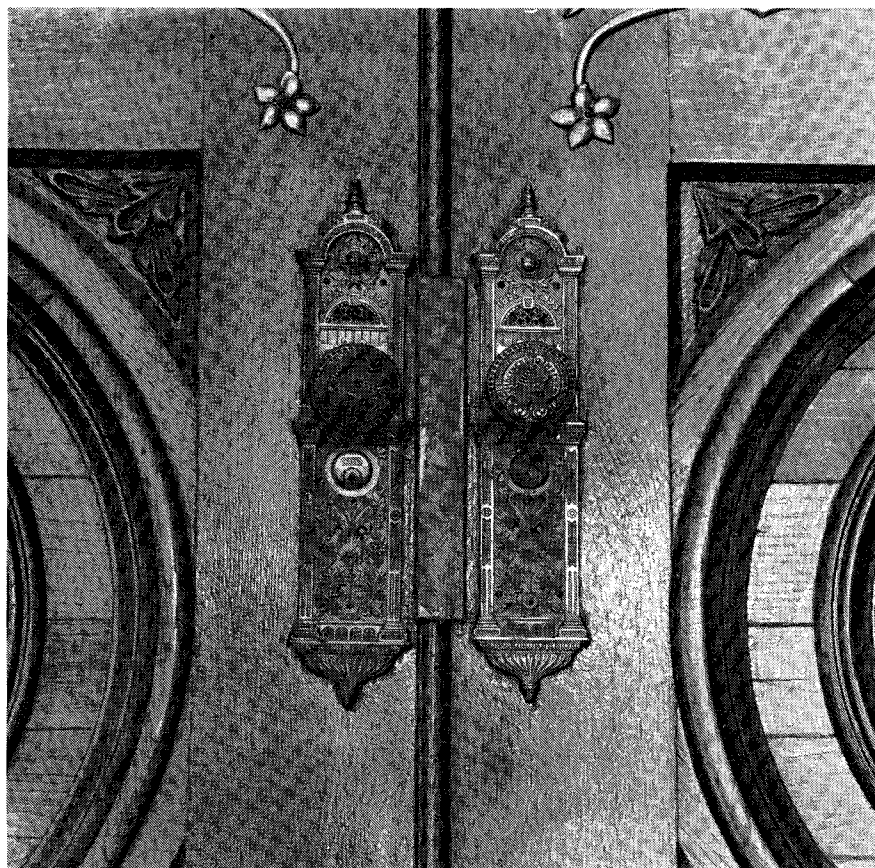
かの悪魔は、あらん限りの力をふり
絞って、誘惑に富んだ詭弁を弄しながら、
40日40夜断食し飢えているイエス
を誘った。次のようになじって言っ
た。「もしあなたが神の子であるなら、
これらの石がパンになるように命じて
ごらんなさい。」イエスは答えられた。
「人はパンだけで生きるものではない。
」また悪魔は言った。「もしあなたが
神の子であるなら、下へ飛びおりて
ごらんなさい。『神はあなたのために
御使たちにお命じになると、あなたの
足が石に打ちつけられないように、彼
らはあなたを手でささえるであろう』
と書いてありますから。」イエスは彼
に言われた。「主なるあなたの神を試
みてはならない。」さらに悪魔の誘惑
が続いた。「もしあなたが、ひれ伏し
てわたしを拝むなら……この世のすべ
ての国々とその栄華とを……あなたに
あげましょう。」すると主は答えられ
た。「サタンよ、退け。『主なるあな
たの神を拝し、ただ神にのみ仕えよ』
と書いてある。」(マタイ4:3, 4,
6-10)

そしてイエスは「苦難の道」を歩ま
れた。

ゲッセマネの苦悩を考えてみよう。
「父よ、みこころならば、どうぞ、こ
の杯をわたしから取りのけてください。
しかし、わたしの思いではなく、
みこころが成るようにしてください。
……イエスは苦しみもだえて、ますま
す切に祈られた。そして、その汗が血
のしたたりのように地に落ちた。」(ル
カ22:42, 44)

あの十字架の残忍さを忘れることの
できる人がいるだろうか。主は言われ
た、「わたしはかわく……すべてが終
った」と。(ヨハネ19:28, 30)

そう、私たちはみな失意の道を歩む
ことになるだろう。もし機会がありな
がら見逃がしたり、権利を誤用したり、
愛する者に教えなかったりするなら



神 殿 の ド ア の 取 っ 手

ば。人はまたみな誘惑の道にも出あうだろう。「さりながら、悪魔が人の子らを試むるは是非必要なり。すなわち人は悪魔の誘惑がなければ己が自由意志を使い得ず…」(教義と聖約29:39)とあるからである。

同様に私たちはまた苦難の道をも歩むだろう。私たちは羽ぶとんに横たわったままで天に昇ることはできない。世の救い主は、非常な苦難にあってから天に昇られたのである。しもべである私たちが主よりも安易な道を期待できるであろうか。復活祭の勝利の前には十字架の悲劇がなければならないのである。

こういった辛い悲しみの道を歩むと同時に、私たちはまた永遠の喜びをもたらず道をも歩むことができる。

私たちはイエスと共に「従順の道」を歩むことができる。

これは決してやさしいことではない。「彼は御子であられたにもかかわらず、さまざまの苦しみによって従順を学」ばれた。(ヘブル5:8)サムエルが残した言葉を私たちの標語としようではないか。「…見よ、従うことは犠牲にまさり、聞くことは雄羊の脂肪にまさる。」(サムエル上15:22)不従順の最後の結末はとらわれの状態であり、死である。他方従順の報いは自由であり、永遠の生命である。

私たちはイエスのように「奉仕の道」を歩むことができる。

人々の間で教え導いたイエスの生涯は、善意の光を投射するサーチライトにもたとえられるものであった。イエスはいざりの手足に力を与え、盲人の目に視力を、耳しいに聴力を、そして死者の体に生命を与えた。

イエスのたとえ話は力ある教えである。良きサマリヤ人のたとえ話でイエスは、「あなたの隣り人を愛せよ」と教えられた。(ルカ10:27)姦淫の現場を捕えられた女をやさしく扱うこと

によって、イエスは慈愛にあふれる理解を持たなければならないと教えられた。またタラントのたとえによって、私たち一人一人に自己を向上させ、完成をめざして努力するように教えられた。イエスは御自分の道に沿って私たちが人生の旅路を前進できるよう、周到な準備をされたのであった。そうでなければ、なぜ「あなたも行って同じようにしなさい」と勧告されたのだろうか。(ルカ10:37)

最後にイエスは「祈りの道」を歩まれた。

三つの永遠の祈りから三つの大きな教訓を得ることができる。最初はイエスが伝道しておられたときの教えである。主は言われた。「祈るときには、こう言いなさい、『父よ、御名があがめられますように。』」(ルカ11:2)

第二はゲッセマネの祈りである。

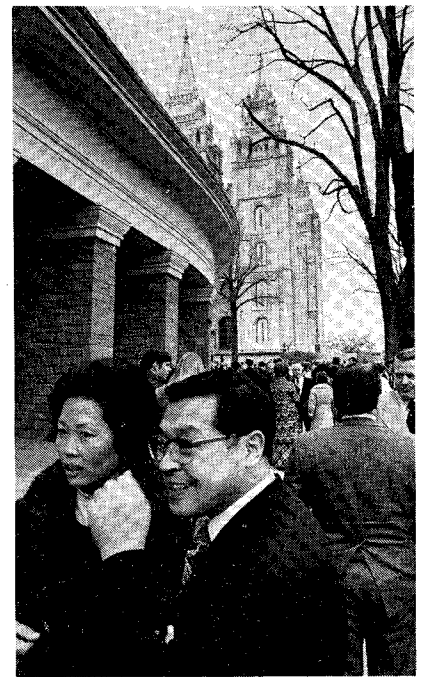
「……わたしの思いではなく、みこころが成るようにしてください。」(ルカ22:42)

第三は十字架の上から言われたものである。「父よ、彼らをおゆるしくください。彼らは何をしているのか、わからずにいるのです。」(ルカ23:34)

私たちが天父と交わり、御父の力を受けることができるよう、祈りの道を歩む信仰を、そして希望を持つのではないか。神の予言者、聖見者、啓示を受ける者が、今日そうするよう私たちに呼びかけられた。私たちはただイエスに従えばよいのである。イエスの歩まれた道を一步一步踏みしめて行けばよいのである。

私が初めてこの予言者と出会ったのは、24年前に私がここソルトレークシティで監督をしていた若いときのことであった。ある朝電話がかかってきて受話器を取ると、次のように語る声が聞こえてきた。「私はスเปนサー・W・キンボール長老です。あなたにお願いしたいことがあるのですが。あな

たのワード部で、第5南街に面した大きなビルの裏に、小さな目立たないトレーラーハウスがあります。そこにナバホ・インディアン^①の未亡人マーガレット・バード夫人^②がいます。バード夫人は、自分が役に立たないつまらない者であると思って、気力を失っています。あなたと扶助協会の会長会でバード夫人を訪問し、友情の手を差し伸べ、特別に彼女を歓迎して下さいませんか。」



か。」私たちはそのとおりに実行した。

奇跡のようなことが起こった。マーガレット・バード夫人は、新しく発見した環境の中で生氣を取り戻し、見えるように明るくなったのである。失意は消え去った。苦悩の中にあつた失われた羊は、訪れを受け、見いだされたのである。このひとつの人間劇に参加した人々はみなそれぞれ成長した。

しかし実を言うと、この場合の本当の羊飼いは、自分の責任下にある99匹をおいて失われた貴重なひとりの人間を気づかって探索に出かけた、この使徒だったのである。スเปนサー・W・

キンボールはイエスが歩まれた道を歩んでこられた。24年前と同様に、今日もそうしておられる方である。

私たちがイエスの歩まれた道を歩むとき、イエスの足音に耳を傾けるようにしようではないか。手を伸ばして大工イエスの手に触れようではないか。そうすればイエスを知るようになるだろう。昔、湖のそばでイエスを知らない者の所へ来られたときのように、名もなく見知らぬ人のように私たちのところへ来られるかも知れない。イエスは昔と同じように「あなたは、わたしに従ってきなさい」（ヨハネ21：22）と私たちに呼びかけ、今の時代に果たさなければならない仕事を私たちに課したもう。イエスは戒めを与えられる。人がそれに従うとき、その人が賢明であるか単純であるかを問わず、苦勞し、葛藤し、災難を経験するうちに、主は御自身をあらわされるのである。人々は主の助けによって葛藤や災難を切り抜け、自分自身の経験によって主がだれであるかを知るようになる。

私たちはイエスがベツレヘムの赤児や大工の息子以上の人、いかなる教師よりも、偉大な教師であることがわかる。すなわちイエスは神の御子なのである。イエスは彫像を作ることも、絵を描くことも、あるいは詩を書くことも、軍隊を率いることもされなかった。一度も王冠をかぶらなかったし、王の笏を持ったことも、肩に紫色の衣をかけたこともなかった。イエスのゆるす度量には枠がなく、忍耐は尽きることを知らず、勇氣にも限界がなかった。イエスは人を変えた。人の習慣、考え、野心を変えた。人々の氣質、態度、性質を変えたのであった。人々の心を変えたのである。

ここで使徒の中でも首格であって、ペテロという名で私たちになじみのある人のことを考える人がいるだろう。

彼はシモンと呼ばれる漁夫であった。疑うペテロ、信仰の薄い、性急なペテロは、イエスが大祭司のもとへ連れて行かれた夜のことを忘れることができなかった。そこには主が貪欲と利己心を責めた祭司や、同じく主により偽善者であると決めつけられた長老たち、そしてイエスによって無知を暴露された律法学者がいた。さらに最も残忍で危険な敵とみなされていたサドカイ人もそこにいた。この夜、群衆は「イエスにつばきをかけ、目隠しをし、こぶしでたたきはじめた。また下役どもはイエスを……手のひらでたたいた。」（マルコ14：65）

たとえ一緒に死ぬようなことになっても、決してあなたを知らないなどと言いませんと約束したペテロはどこにいたのだろうか。聖なる記録には次のようにある。「ペテロは遠くからイエスについて行って、大祭司の中庭まではいり込み、その下役どもにまじってすわり、火にあたっていた。」（マルコ14：54）この夜ペテロは主の予言どおりイエスを知らない、と3回否定した。主はつつかれたり、あざけられたり、またなぐられたりして恥ずかしめを受けていたが、沈黙の中に威厳を保っておられた。そうした中でイエスはふりかえってペテロを見られた。

ある年代学者はペテロに生じた変化を次のように書いている。「これで十分であった。ペテロにはもう危険という言葉は存在しなかった。また、もはや死を恐れなくなった。彼は外へとび出して、朝が白みかけるのを待った。この悲嘆に暮れ、深く罪を悔いた使徒は自分の良心に責められて立っていた。そこで彼の昔の生活、昔の恥、以前の弱点、前の自己は、敬虔な悲しみの中に死に渡され、新たに高貴な誕生を迎えたのであった。」（フレデリック・W・ファーラー、*The Life of Christ* 「キリストの生涯」〔英文〕P.604）

次にタルソのサウロがいる。サウロは学者で教師の書物に通じていた。一部の今日の学者はこの教師の書物を非常な知識の宝庫としている。しかし何らかの理由でこれらの書物もパウロの心を満たしはしなかった。彼はいつまでも次のように叫び続けた。「わたしは、なんというみじめな人間なのだろう。だれが、この死のからだから、わたしを救ってくれるだろうか。」（ローマ7：24）ところがある日パウロはイエスに会った。そして見よ、すべてが新しくなったのである。その日から死ぬときまで、パウロは人々に「古き人を脱ぎ捨て」、「真の義と聖とをそなえた神にかたどって造られた新しき人を着るべきである」（エペソ4：22, 24）と説き続けた。

時間の経過も人の生活を変える贖い主の能力を変えはしなかった。主は死んだラザロに言われたように、今日も私たちに「出てきなさい」と呼びかけておられる。（ヨハネ11：43）疑心暗鬼や罪の悲しみ、不信の死から出てきなさい。新しい生命にいできたれ。出てきなさい、と。

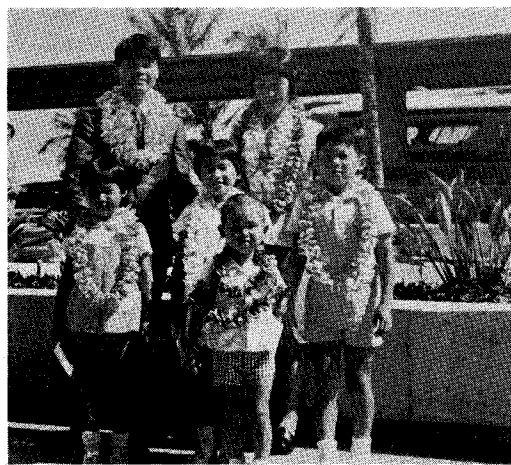
私たちがそのようなわずらいから出て、イエスが歩まれた道に沿って歩むとき、イエスが立てられた次の道を覚えよう。「見よ、われはイエス・キリストなり。予言者らがこの世に来ると証をしたるその者なり。われは世の光にしてまた世の生命なり。」（Ⅲニーフアイ11：10, 11）「われは始めなり終りなり。われは生ける者なり殺されたる者なり。父と汝らの間の仲保者なり。」（教義と聖約110：4）

イエスの証に私の証を加えたい。イエスは生きたもう。今日主の予言者が支持された。スペンサー・W・キンボール大管長がその人である。以上のことをイエス・キリストのみ名によって証する。アーメン。

神殿訪問を終えて

新 谷 久 子

(姫路支部)



結婚して10年、初めての訪問に家族6人がそろって参加できましたことを、何よりもうれしく思い、心より感謝致しております。

今年も私共の力では兄弟だけの費用しか用意できないのでとりあえず、兄弟ひとりでも行って下さいと話し合っていました。

その次の家庭の夕べは、兄弟が仕事で、子供と私だけでした。「みんな一緒に神殿に行こうね」と言って約束をしておりましたので、楽しみにしている子供たちにお父さんひとりしか行けないことを話すのは、とてもつらいことでした。長男はこう話しました。「お父さんとお母さんが結婚してすぐに神殿に行っておけばよかったね。そうすれば僕たち子供は行かなくてもすむのでしょう。」私は母として、はずかしいと思いました。けれども4人の子供を私の前に呼びよせてこう話しました。「お父さんとお母さんは結婚するときに、両親には何も助けていただかなかったの。貧しいお父さんとお母さんの力と教会の兄弟、姉妹の助けによって結婚式を行ないました。だから神殿に行くお金がなかったのよ。またすぐに国彦君、昭子ちゃん、智恵子ちゃん、英士君が生れたので、お父さんの働いたお金では生活するのが精一杯で、神殿

に行へお金がつけなかったの。でも一人一人が、神様の言われることを忠実に守るなら、神様がきっと助けて下さって次の機会には行けると信じています。」こう話しました。長女は、「私は神様に信仰と証を強くもちたい。そうして優しい心をもちたい。そうしたらきっと行けるね」と言ってくれました。私は本当に子供たちのきれいな心を持ち、霊的に祝福を受けていることを神様に心から感謝致しました。また、これを兄弟に伝えて、共に喜び、一時も早く家族そろって行けるように努力しようと決心致しました。これから系図を整えて提出しようと思い、いろいろ謄本などを取り寄せて、ホーム・ティーチャーの助けにより書き始めましたが充分には進みませんでした。けれども私たちが系図のことに一番思いを寄せて働いていたときに大きな助けと祝福が参りました。それは私共にとってこの世においては一番大いなる祝福であると思いました。ある兄弟たちが僕たちのボーナスがこれだけあるので使ってくれてもよいというのでした。それまで私共はできるだけ人の助けを借りないで行ける様にと考えておりました。けれどもそのお話があって、また彼らの深い愛によって、私共の考えが変わりました。毎年今度こそはと思いながら、それが実現できませんでしたので、助けて下さる方に感謝して助けていただき、早くお返しできるように頑張りますように話し合いました。そうして多くの兄弟姉妹から私共家族のために助けをいただき、無事神殿訪問をすることができました。

一番末の子供は今、3歳8カ月になりましたが、自分のほしいおもちゃなどがあってもがまんしてくれ、「神殿から帰ってから買ってね」と言って、助けてくれました。また訪問の準備をするために大きなトランクを出してきますと、「ボクがこの中に入って行ってあげようか? そうしたらボクのお金、取られないやろう」と言いました。私は思わず目がしらが熱くなりました。

私はホノルルに着きましたときからハワイの兄弟姉妹たちの深い愛を受けて、私たちのふだんの生活も常にこの様にあるべきだと思いました。それだけではなくて、「神殿の中で働いて下さる兄弟姉妹のお姿が本当にこの世の天国に住む天使のようである」と兄弟が話しましたが、私も確かにその通りであるとはっきり証することができます。なぜなら神殿職員の方たちが「確かに神殿の中にいますと心がきれいで思いが深く、愛に満ちて幸せです。ですから私たちは神殿の中で働いているときが一番幸せです」と話して下さいたからで

す。また一番うれしかったのは、結婚して念願だった夫婦の結び固めをすることができたこと、また、家族の結び固めを無事にすませることができ、神殿の中で働く人々の強い信仰と証を知ることができたことです。私たち夫婦の結び固めをすることができたこと、また、家族の結び固めを無事にすませることができ、神殿の中で働く人々の強い信仰と証を知ることができたことです。私たち夫婦の結び固めの儀式を執り行なって下さったのは以前日本で伝道部長として働いて下さった小松兄弟でした。私共は心からの喜びと神への感謝と多くの人々の助けに応えることのできた喜びで涙をとどめることができませんでした。けれども次の日に、子供たちとの結び固めが予定されていたのに「1日予定がのびました」と発表されたときは本当にびっくり致しました。なぜならもしかして私には子供と結ばれる資格がないのでは、と思ったからです。私はその夜ひとりで祈りました。「どうか私にその資格がありませんでしたらどうすべきかを教えて下さい。そして子供がけがをしないように、また病気をして神殿に入ることができないという状態にならないように」と。本当に子供たちとの結び固めのときまで、私は安心することができませんでした。子供たちが神殿職員に連れて来られて同じ部屋に入り、アンドラス元伝道部長によって儀式をしていただいで私たちの家族が、いかに神様の見守りを受け、愛されているかを知ることができて安心致しました。儀式が終わったときにアンドラス部長は「あなたたちの家族は本当にすばらしい家族です。皆と一緒に結び固められてよかったですね。子供たちは、お父さんやお母さんを愛しているでしょう。お父さんとお母さんにキスをしてあげることができますか。どうぞ今そうしたいならキスをしてあげなさい」と言って下さいました。私共家族はひとつに集まり、肩を抱きあって喜びの涙で頬をぬらしたのでございます。この世のどれほど立派な地位よりも、私たちは今受けて喜びとするこの家族の祝福を大切に、神に頼り、神の誠命をしっかりと身に受けて生きていこうと決心しております。そしてひとりでも多くの兄弟姉妹がこの大きな喜びと証を自分自身で受けることができますように、若い兄弟姉妹はよく準備して早く結婚し、神殿で結ばれますように心より願い、お祈りしております。

ハワイ神殿訪問団に参加して

杉 本 政 穂

(東京第4ワード部付属南支部)



ハ ワ イ 神 殿 の 前 で

「何か変わっただろうか」「何が?」「神殿訪問してから我家さ」こう話し合いながら、やはり変わった、そして変わろうとすることに今までと違った確かな目的と喜びが伴ってきたといえます。神殿の儀式を受けて、神様に近づくという具体的な経験と教えを通じて、永遠というものが単なる知識や観念ではなく、もっと現実的なもの、肌で実感し得るものとして私たちの生活の中に入り込んで来たからです。

8月16日夜、私たち夫婦と2、3、4歳になる3人の子供合わせて5人は1週間の神殿訪問を果たし、無事羽田に帰着しました。税関を通り抜けてそこに雨の中をわざわざ出迎えるために来て下さったステーキ部長はじめ多くの兄弟姉妹たちの顔を見いだしたとき、ここに至るまで、私たち神殿訪問団のためにかけて下さった数えきれない人々の愛と奉仕とを改めて身を感じ、感謝の気持ちでいっぱいになると同時に、むしろ自らを省み、これからの生活を展望して一種の緊張をおぼえるのでした。

それは奇跡と感謝と悔い改めとそして安らぎと希望の1週間でありました。私たちは恵まれて、神殿における4つ

の儀式のうち、死者のためのバプテスマには自らあずかることができませんでしたが、神権の儀式とそれに関連するエンダウメント、結婚の結び固め、両親と子供との結び固めの儀式を受けることができました。永遠を続けたもう主の前に私たち家族が家族として正式に認められるには、主から出た正当な神権の権威によらねばなりません。神殿の儀式にあずかることによってこのたび初めて、この世という限られた世界から、永遠という広々とした世界へ家族として門出する資格を与えられたのであります。たとえこの世をひとりで渡り切ることができるという人があっても、永遠の世界をひとりで進み得ると断言できる人はおりますまい。神様は家族を土台として成長しなさい、家族と共に救われよと言っておられます。そうして死者にも家族の結び固めの道を開いておられます。家族として認められたこと、そして永遠に解任されない父親としての責任を授かったこと、これがこのたび受けた恵みの第一であります。

さて神殿訪問にまつわる奇蹟と感謝の証を2、3述べたいと思います。私が初めて末日聖徒イエス・キリスト教会を知り、バプテスマを受けたのは1958年、ポール・C・アンドラス長老が日本極東伝道部長として献身されていたときであります。神殿において夫婦の結び固め、子供たちとの結び固めの儀式のいずれをも、尊敬申し上げるアンドラス長老によって授かったとき、今さらながら私たち一人一人に関心を持ち、きめ細かな配慮を下さっている神様の愛をしみじみと感じ感謝に耐えません。

一方いろいろな試しがありました。神殿訪問が近づくと試されますよと言われておりましたが、正にその通りでありました。寺坂監督に激励されて神殿訪問を決心して以来、経済の問題をのけてもいくつもの難問がありました。まず1週間の休暇は仕事の立場上極めて難しいものでしたが、よく話して担当役員部長の理解を得ることができました。しかし、出発1カ月前になってほとんど不可避と思われる業務上の事態が起こりそうになったのです。このとき監督は断固たる口調で、「大丈夫です。そのようにはなりません。先に延びるでしょう」と言われました。そうしてその通りになったのです。次の試しは出発の1週間前にやって来ました。真中の子供が伝染性の病気にかかったのです。2、3日おいて下の子供に、そしてついに上の子供にも移りました。もはやあきらめざるを得ない状態でした。出発間際にやっと全快近くまでこぎつけることができたのは坂本兄弟姉妹の親身のお世話の

賜であります。神様は生きてましまして、忍耐されて私たちの罪を赦したまい、悔いて再び立ち上がるように激励されます。ひとりの義人の故に街を亡びから救うこともなさいます。仕事に名を借りて何ひとつできなかった私の健康を気づかいながら、ほとんど一切の訪問準備を祈りをもってやってくれた家内を神様は憐れみたもうたのかも知れません。

神殿訪問から帰ってどうですか、と問われたときの私の返事は、「はい、この次行くときにはもっとうまくやります。そうです、もっと神様に近い状態で行動したいという思いでいっぱいです」と申します。私なりのひとつの神殿訪問の意義を見つけだしております。それは1日の締めくりに朝晩の祈りがあり、1週間の生活の立て直しのために安息日があるように、この世の地位や権威の一切入り込む余地のない神殿の中で、心から謙遜になって、主から授けられた神権の儀式とエンダウメントのステップを踏むことにより、永遠の生命にいたる成長の場としてのこの世の生活に新しい勇氣と希望をもって立ち向かう。そのための心と身体の更新の機会が神殿訪問ではないでしょうか。

最後に私は、このたびの神殿訪問にグループの一員として参加できたことを心より感謝いたします。かりに自分たちだけで神殿を訪れたとしたら今日受けた恵みと教えの半分も得られなかったと思います。神殿職員、BYUハワイキャンパスの方々の奉仕と犠牲もさることながら、各地から集合した兄弟姉妹の集団を、グループ・リーダーの兄弟を柱として、文字通り寝食を忘れて挺身お世話下さった兄弟姉妹たち、訪問計画の初めから準備して下さった兄弟姉妹たち、とりわけ同じBグループで働いて下さった井上兄弟姉妹、玉屋兄弟たちの奉仕を身近に見て、自分自身がベストを尽くし切ったか、本当に謙遜であったのか反省させられるのです。次の機会にはもっと神様に近い状態であり得るように、毎日の生活の中で鍛錬したいと決心しております。発心、決心、相続心と言いますが、弱い私たちは何ごととも考えつき決心するまではよいのですが、それを続けることにいつも失敗しがちです。「変わったかい」「変わったでしょうか」常々声をかけ合って、神殿で神様と堂々と胸を張ってまみえられるように毎日毎日に挑戦したいと思います。

神殿の儀式が誠に神様から出たものであり、それ故にこそ私たちの心と身体を変え得る働きがあるのであり、永遠の成長の一過程であるこの世の生活に立ち向かう勇氣と具体的方法を与えてくれるものであることを証いたします。

新しい讃美歌集、編集準備始まる

— 待たれる会員の応募 —

教会音楽部は新しい讃美歌集の編さんに着手、現在全世界の教会員に参加を呼びかけている。音楽部実務部長である十二使徒補助のO・レスリー・ストーン長老はこう語っている。

「作品を集め、評価し、さらに検討を加えるには相当の期間を要すると考えています。音楽部の各委員会では、新しく讃美歌として加えるのが妥当だと思われるものだけでなく、過去に編集されたものもすべて検討することになります。

また、教会員で作詞作曲される方は、作品を音楽部へどしどしお寄せ下さい。」

では、その応募規定をあげておこう。

1. 作曲をする人は自分で歌詞をつけること。作詞者との共作も可。ただし歌詞を応募する人は曲をつけないで提出する。
2. 回復に関するものがほしい。現在の讃美歌集で取りあげているテーマの範囲をさらに広げるものでもかまわない。聖餐、神権、家庭、家族などについて歌ったものは末日聖徒にとって非常に意味の深いものであり、特に必要とされる。
3. 歌詞は判読できるようにきれいに書くこと。できればタイプする。メロディーも判読できるように五線紙にきれいに書く。(できればインク使用。) また曲は1ページ1曲にとどめる。
4. 英語国以外の国の人々は自国語で作詞したものをそのまま提出してよい。
5. 採用された歌詞および曲の著作権は教会所有となる。また採用分について、必要上多少の改作または編曲をすることがあるので、了承されたい。
6. その他新しい讃美歌集に関して意見や提案があれば、教会音楽部へどしどしお寄せいただきたい。

ストーン長老は過去の経験からこのように語っている。

「新しい讃美歌集に組み入れられる讃美歌は比較的に少ない数になります。従って不必要な労力を省き、また応募者をがっかりさせることがないように、まず資格ある地元の音楽関係者に相談し、必要な援助を受けようお勧めします。

長年経験を積んだ才能豊かな作曲家や作詞家でも、讃美歌として受け入れられるような作品を創り出すには、相当の試作、改作をするものです。

末日聖徒イエス・キリスト教会が組織されてすぐに、ジョセフ・スミスを通して、「教会の用に供する」「聖なる歌」を集める指示(教義と聖約25:11, 12)が啓示された後、エマ・スミスによって編さんされた最初の讃美歌集「末日聖徒教会聖歌集」(*A Collection of Sacred Hymns for the Church of the Latter Day Saints*)が出版されたのは1835年のことである。以来、幾度も大改訂が行なわれ、またその中の多くが約25カ国語に翻訳されている。

エマ・スミスが最初の讃美歌集を編さんした後、1841年11月1日の「タイムズ・アンド・シーズンズ」に次のような記事を出している。

「……詩作の才を与えられた方、詩心がほんの少しでもある方でこの仕事に興味をお持ちの方はどなたでも、新作改作を問わず力作をすぐにお寄せ下さい。詩作の才を与えられた人をお願いしたいと言いましても、他の人の作品は除くというわけではありません。義人の心に喜びを与える歌ならどのようなものでも結構です。すぐにイリノイ州ノーブー市のエマ・スミス宛お送り下さい。」

最後にストーン長老はこう語った。「マーク・E・ピーターセン、ボイド・K・パッカー両十二使徒評議員を顧問としていただくのが音楽委員会は、『義人の心に喜びを与える歌ならどのようなものでも結構です』というエマ・スミスの言葉に賛同したいと思います。」

作品の送付先、その他については東京ディストリビューション・センターにお問い合わせ下さい。

なお、作詞作曲にあたって「末日聖徒の讃美歌著作の指針」(聖徒の道1973年12月号)、「礼拝と音楽」(聖徒の道1974年3月号)などの記事は大きな助けとなることでしょう。



「それゆえに、あなたがたは行って、
すべての国民を弟子として……」

救い主は復活された後、昇天するまでの間、カリラヤとユダヤで弟子たちに教えを説かれた。主は言われた、「それゆえに、あなたがたは行って、すべての国民を弟子として、父と子と聖霊との名によって、彼らにバプテスマを施し、あなたがたに命じておいたいっさいのことを守るように教えよ。見よ、わたしは世の終りまで、いつもあなたがたと共にいるのである。

（マタイ28：19、20）